シュンの異世界放浪記

寺井団歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
シュンの異世界放浪記

【Ｎコード】
Ｎ１４５４Ｘ

【作者名】
寺井団歩

【あらすじ】
シュンは夏休みの深夜、寝苦しい暑さに負けて散歩に出た。途中、白い何かに攫われた。そして気が付いたシュンに、我らは神で、君は我らが管理する世界に強制的に召喚された。と、言われたが。
神と言う相手は、さらに続けて言う。だが、君を召喚した相手は居ないし国も無い。何故なら、彼らは承知の上で異なる星の世界からではなく。この世界とは何のつながりも無い、まったくの異世界から人間召喚と言う禁忌を犯した。

それは世界間の理から外れた行ない、その理由も、自分達の欲望の為侵略戦を行い。国土拡張の為に、戦わせる戦士か魔道師召喚の儀式を行なったのだ。其れは聞けぬ我が儘、なので我々が滅ぼした、彼らが存在の記憶も記録も一部を残し消した。

だが、君は君の生まれた世界には帰れない。この星の世界には魔法が有り、魔物も魔獣も居る、そして人以外に亜人と獣人も居る。

時代背景は君が生まれた世界の、中世のヨーロッパ・北アフリカ・中近東・アジア西部の感じだ、地形は当たり前に違うぞ。

この世界を知る為に、暫くは放浪するも良し。否、なら何処か気に入ったところを探し、好きに定住するも良いだろう。

宇宙は一つか（前書き）

同じタイトルの小説が有りましたのでここのタイトルを変えました。

宇宙は一つか

この宇宙を創りだしたビッグバン、宇宙は高温高熱の末に爆発により生まれたとか。そして、今の宇宙は何度目かのビッグバンによりできたか、は分からないと言う。

この、地球を含む宇宙と言う世界、宇宙は一つなのだろうか。其れこそ、星の数ほど宇宙が有ると思えばファンタジーの世界を書ける・・・と、思う。

＊＊＊＊

地球が有る宇宙世界とは違う宇宙世界で、地球世界の有る宇宙世界とは違うエネルギー、其れは魔力。

その魔力世界で、また違った星の世界の中の一つの国で。神より、禁忌とされた儀式が行われようとしていた。人型生物召喚魔法、言わば勇者召喚魔法の儀式の様だ。儀式を行なった星と、星の世界を抱える宇宙世界の中に、召喚条件が整った者が居たのならば又話が違っただろう。不幸な事に、召喚条件が整った者はこの星の世界にも、星を抱えた宇宙世界にも居なかった。さらに不幸な事に、召喚魔法の魔法エネルギーは他の宇宙世界にまで広がった。

一つの宇宙世界、其処に地球が有った。地球世界の日本と言う国に、不幸な少年が居た。

宇宙は一つか（後書き）

理屈なんてどうでもって言うのは・・・駄目っすかね、まぁ、魔法エネルギーどんだけじゃっては思うけど。反省はしませんし後悔などさらさらありません。まして恥などと、書いて居るだけで恥さらしっすから。・・・しかし滅茶苦茶だね、気がくるっているとしか思えん。

詫びる神達

少年の名は、黒瀬俊。十五歳、高校一年生。

高校生初の夏休み、熱帯夜の丑三つ時に暑さで目が覚め散歩に出た。用心の為、警棒型のスタンガンを持って。シュンの家は、半分池に囲まれた石垣だけの古城近くに有る。元はその城主の子孫だとか、シュンは多分ＤＮＡ的に無縁と思って居る。

＊＊＊＊

何が有ったのか、少年は知らぬ景色の中に居た。そこは透明な黒い世界で、少年は白くは有るが光らぬ円の中に入り浮かんでいた。少年の前には四人ほどの人らしい形をした者達が居たが、どうやら少年を観察して居る様だった。気絶しているのか眠っているのか、少年は仰向けの形のまま浮かんでいて動かない。

白い光らぬ円の中のシュン、気が付いたのか目覚めたのか、もぞもぞと動き始めた。

「少年よ、目覚めたかな」。

「誰」。

「君の世界では神だな」。

シュンは、呆れた様に目の前にいる相手を見る。

「信じられないだろうが事実だ、そして気の毒だが君の生まれた世

界に君は帰れない」。

もう一人の神と名乗った者の仲間だろうか、シュンに話しかける。

「一度渡ってしまっては返せぬのだよ少年、我らが気付いた時には君はこの世界の中に居た。ある国の召喚魔法により召喚された、だがそれは我々神の定めた禁忌の魔法だ。なので召喚主達を消滅させ、関わった者達のその記憶を消し、国は滅ぼした」。

少年は、話を聞きながら辺りを見渡す。白い、ただ其れだけの居る場所。どちらを向いても白、視覚的に距離感は無い。無風の冬の野原で、切れ目なく降る豪雪の中に居る感じだ。

そんな異常な感覚の中「そんなの僕には関係ない、元の世界に戻してよ」。

多分無駄だと思ったが、そう叫んだ。

「少年よ、儂はこの世界の第一柱位である神じゃ。すまぬと思うが、どうにもならないのだ。だが侘びとして、魔法が有り魔物魔獣も居るこの世界。我らから最大の魔力と魔力量を与えよう、そしてあらゆる能力を与えたぞ。後はその方は好きにこの星の世界を生きるがよい、命も三百年は生きれるようにしたが、百を超えたら好きな時に死ねるようにした」。

そんな訳の解らない事を言われて、直ぐに納得するだろうか。

「馬鹿言ってんじゃねぇよ、そんなの周りにばれたら僕が危ないじゃないか。国とか・組織とかに、僕を良い様にするすべが有ったらさ」。

「それは儂の知った事では無いの、儂は神である力と能力を。神が人間風情の事等、理を外れなければ聞く必要などないのだぞ、それに誰かがそなたに害をなそうとしたり。騙してどうのと言う事に成れば、個人であれ組織であれ国であれ、我らの加護が発動し、最大の不幸が掛かるな」。

「他の神様も同じ意見なのかよ」。

「まあ、概ねそんな物だ」。

そう、未だ若い様な声が響く。

「んー、暇なんで。お前、星が崩壊しない位に暴れても問題ないぞ」。

それを切っ掛けに、我も我もと言いだした神達。好き勝手に弄られたシュンは気絶し、その間頭から足元までこの世界の物に換えられた。

「ふふふっ、いい仕事をしたぞい満足じゃ。皆も最高の仕事をした様だ、少年よなんでもできるから試すがよい、ん～当分はこのままで生きてゆくがよいが・・・多少なら変えても良いからな」。

シュンは生まれた世界に帰る事は出来ないと決定した、が、せめてもといた世界の両親や親戚友人兄弟全ての関係者の記憶から。居なかった者としてくれと頼んだ、自分は事実から逃れられないが。せめて家族が、友人知人が悲しまない様にと願った。

「それも無理じゃ、まっ、神隠しと認識されるようにするのが精々じゃな」。

「では行ってまいれ、余程世界的に暴虐な事でもしない限り我らは介入せぬ」。

「ふふっ、好きに生きるがよい。望郷の念は軽くなる様、少し弄った、悪く思うなよ」。

「あんまり馬鹿はするでないぞ、ああそれから言って置く。動物や魔物や魔獣、そして盗賊等の悪者を殺しても。そなたの心に負担が掛からない様にもしておいた、壊れられては楽しめぬ」。

「んふふっ、もげろって言われる位にしておいたからね」。

もげろってなんだ［元から良い顔だぞっと呟いたが］、気が付いた・・・黒髪黒目は拙いんじゃないか。

「下に降りたらわかる、年齢はお前の世界と同じにしたが、そう見られるかは保証はしない」。

纏めて言って欲しいと思ったのはシュンだけか。

「おおそうじゃった、使い魔は八種まで持てるからの。ペットでも良いし使役でも良いし、あるいは戦いに連れて行く使い魔など、分けて連れ歩くも良いだろう。がっ、人との交流も忘れるでない、其れが無ければ意味も無いしの」。

其れが最後となって、漂いおちるシュンだった。

詫びる神達（後書き）

馬鹿馬鹿しさと、馬鹿さが弾けて居るよな・・・・うん。

閑話その一　　―シュンは神様達の―（前書き）

帰せないとは言った、死体でなら返せるが、それでは意味は無かろうと返せぬと答えた。

閑話その一　　ーシュンは神様達の一

間違ってはおらぬが、神である我らも理が違う世界に又作り替えて帰す等面倒。先に言った様に作り替えた瞬間この世界では死ぬし、此処に有った身体のまま、元の世界に送れば其れは又死体と成る。神とは云え、異世界間の移動はきつい物が有るのだ。

A「まったくあの欲惚け王国の馬鹿どもが、我らにこれ程の手間を掛けさせるとはの。だがもう壊したからの、二度と使えんじゃろう」。

B「あら、でも一つだけ良い事をしたと思うわよ」。

D「んふふっ、おもちゃを我らにか」。

C「観察用の異世界動物の間違いじゃろ」。

D「いやいや、あれは異世界から連れてきたペットじゃと思えばよいじゃろう。言葉は分かるし何がしかやって置けば、自分で食べ物をも探すし仲間を集める。集めた仲間同士で色々と騒ぎを起こすしの、じゃから当分は退屈はせんじゃろう」。

B「C、あんたあたしに黙ってあの子を苛めたら、百倍苛めてあげるからね」。

C「うむむっ、それはそれで嬉しいかも」。

B「C、なんか言った」。

C「い、いや・・別に」。

D「B、ワシはいいのかな、苛めるつもりは無いがなんだか面白くないの」。

A「D、さり気無く焼き餅を焼いた様な発言はよせ、気持ち悪い」。

D「Aよ、何を言うか。まるで儂がBに惚れて居る様な言い方じゃが」。

A「あん、違ったかの。おぬしは事あるごとに二人へ絡むではないか」。

D「なんと、そんな風に見えて居たのか・・・おお何と言う事じゃ？先代に申し訳がない」。

B「ごらD、あたしじゃ相手不足だと言うのか。あっ、ブッ細工で悪かったな。ってかあんた、加齢臭振り撒く神って聞いたことが無いわ、近寄らないでくれる臭いから」。

D「ぐっちゃ～あぁぁぁ～～～、あぅ～～～～・・当分立ち直れぬ。Aょ、後は頼む」。

A「知るか馬鹿め、ん・・Dの使い魔をシュンにくれてやろう」。

全員「賛成～」。

B「あたしも一体あげ様かな、Dのはあの馬でしょ。あたしはどの子をあげ様か」。

何時の間にか、どの使い魔をシュンにあげ様かの話に成って居た。
何時の間にか、どうやらシュンは神様達の慈しむ相手となって行くようだ。

閑話その一　　ーシュンは神様達の一（後書き）

無理やり閑話・・・意味のない。

神は何を考えて居るんだか（前書き）

「付けた力と能力は、向こうに到着してから脳に刻まれる」。
誰かがそう言っている。
「必要な生活物資や武器防具、生活資金や宝石鉱物を、ポーチは異次元ボックスに、背嚢には異次元倉庫に繋がっている。後で覗いてみるがよい」。

神は何を考えて居るんだか

シュンは呆気にとられている、何故なら、草木の一本も無い大荒野に居るのだ。見渡せる地平線に、緑のかけらも見当たらない。ついでに身を潜ませる物も場所も見当たらない、もっと言えば虫一匹の生き物の片りんさえも感じないのだ。

「どうしろって言うんだよ、あー・・・荷物の中身を確認しないとな」。

当然有る物と思った生きる為の荷物、無い・・・なかった。

「えー、武器と防具と何かの装備品だけ。嘘、食べ物も何もないなんて？」。

突然脳に響いた言葉。

「いや、すまんすまん言って置いて渡すのを忘れて居たわい」。

ポンと擬音がするような感じで、ポーチと背嚢が現れた。

神様って言う奴も、ボケるのかなとシュン。

一体全体、この荒野からどうやって脱出しろって言うんだよ。どっちに向かえって言うんだよ。そう頭の中でぼやくと、シュンは又気絶した。其れは、知識解放・能力解放・技能解放。神に付けられた全ての知識技能が、一斉に脳に刻まれたからだ。

「ぐあぁ～気持ち悪いわ、頭痛いわ、あ～神のくそったれが」

どれ程の時間が過ぎたのだろうか、気絶から目覚めたシュン。知識で得た、ポーチから繋がっている異次元ボックス。其処から飲み物を取り出しながら悪態をつく「予備知識は付けられて此処に置かれたが」本格的な知識は現世でってか。

「成る程ね、此処で好きなだけ魔法の練習をして。その後ここからでろってか」

シュンに、元の世界への郷愁は少ない。ついでに言えば、生き物や人を殺しても精神的に負荷がかかる事はあまりない、等が有る訳もなく。そうなった立場に成ったら、当たり前に苦しむかもしれないが。神様が色々弄ったらしいから、それ程心配はしていない。まあ幸いな事にと、言えるかは分からないが、田舎育ちのシュン、生きた鳥を絞める事等に戸惑いは無い。

シュンは置き去りにされたその場所に、土系魔法で建築用資材を作り。そして更に、資材をカスタマイズして住居と工房を作った。誰かが見たら、凄くシュールだろうなと思った。

「しかし、この星って地球の1?5の大きさか～太陽との距離とかもそんなのかな。まっ、宇宙に出る訳じゃないから関係ないな」。

そしてこの星の世界での半年、荒野は砂漠といって良い位の荒れた土地に成った。

「さて、そろそろ他所へ行こうかな、人恋しいし」。

シュンはそう言いながら、大地に手の平を置き砂漠と変わった荒野の範囲に魔力を伸ばす。

「範囲陥没」。

そんな事を一週間の間幾回か繰り返した。

予想以上に有った魔力に、シュンは当初死のうかと思った。だが、魔力分散と隠ぺいや放棄などの方法で何とか隠せた。その内神様ってのが多すぎたって言って来るだろう、そんとき削って貰えばいいさとも思って居るが。

「知らん顔をされるかもな、ってか、されそうだ・・・全体的にあいつ等無責任だし」。

ボソボソ独り言、半年も一人でいたため癖に成った様だ。

直径１３０キロ以上深さ１００メートルは陥没しただろう、地下から海水が湧きだして塩水湖に成るかもな。シュンはそう思った、この荒野が海抜０メートルに有る事を知り、又海が近い事を知っての事だが。

それからシュンには自覚が無い事だが、この陥没作業が荒野の周囲に有る数か国に多大な影響が有った事を。其れとも、知る由もないと言うのが正しいのだろうか。人や他の生き物を拒んでいた荒野、それが一週間ほどで陥没した等とは、人成らざる神が暴れた後と信じられた。シュンが此処で、魔法の練習をしていた等は誰も知らない事なのだ。

偽の神様伝説が又一つ生まれた。

神は何を考えて居るんだか（後書き）

手を入れてもどうにもならない話になった・・・・畜生ぉぉぉぉ～～～。

閑話その２　ー神の伝説ー　　馬鹿っ子に言われたくない（前書き）

Ｃ「あれぇ～、シュンの能力ってあの程度だっけ」。

閑話その2　ー神の伝説ー　　馬鹿っ子に言われたくない

A「まっ、精神的な者も有るからの。劣化版としては上等じゃろう」。

C「所でBよ、Dの使い魔の馬を何時シュンに渡すんだ」。

B「もう少し時間が必要ね、ほら、あの町に着いてから一寸間を置いてね」。

A「成る程、あの竜人の子孫を操ってか、しかしどうやってあの馬を手に入れたんだ。仮にも神の馬だぞ、Dの奴何をやらかしたんだ」。

C「あれは神の馬の子孫だよ、先祖がえりに近い位の奴だからね」。

D「勝手に儂の馬をシュンに遣るなんて許さないぞ、ん、なんで彼奴があんなところに」。

C「うお、先祖返りした奴じゃないのか」。

D「しばらく放って置いたからな、天界突破して下界に降りた様だ」。

B「ねぇ、D。彼奴、そらを駆けれるって言うの忘れている見たいよ、飼い主そっくりなお間抜けさんね、それとも惚けたのかしら」。

D「放置しすぎじゃったか、後で伝えんとな」。

A「うーん、仮にも神の馬だ。従属や隷属の呪術や道具は効かないはずだが」。

D「Aよ、そうなのだが能力は落ちる、魔族の高位の者にでも捕まったか」。

B「成る程ね、魔法を使えないみたいよ」。

C「不味いな、それでは普通に人間でも殺せるぞ」。

D「なんとかする」。

＊＊＊＊

A「所でシュンは何をしているんだ、魔法の威力の確認をしているかと思ったら。何だか知らないが穴を掘って居るぞい」。

B「荒野を砂漠に変え、砂漠を掘って巨大な縦穴」。

C「げっ、神の伝説だと」。

D「シュン、なんと言う馬鹿な伝説を」。

A「シュンの世界では、ペットは飼い主に似るそうだが」。

誰が飼い主だと、B・C・Dの眼がAを嫌そうに睨み。Aを人差し指で指さす。

A「皆、親たる神に、指さす無礼を教えられなんだか」。

C「Aよ、そなたは親たる神に馬鹿っ子とよく言われていたな」。

B・D「「我らもそれは知っている、そんなそなたに言われたくねぇ〜よ」」。

A「声を揃えて言われるなんて」。

B「最初に話を振ったのはあんた、馬鹿なんだから。墓穴を掘るのは得意だし、知的に見えるのは顔だけって言うのは。とっくに神階で知られているんだからね」。

Aは、滂沱の涙を流している。

閑話その2　ー神の伝説ー　　馬鹿っ子に言われたくない（後書き）

うーん、ちっとも面白くないのは何故なんだ。

普通の人に成ろうと思う・・・削ろう魔力量（前書き）

余りにも、人外な自分に疑問を持ったシュン。

「言っちゃあなんだけど、今の儘の魔力量なら普通に何もかも近寄っては来ないよね、神様聞いてる？」

普通の人に成ろうと思う・・・削ろう魔力量

シュンは今、自分で自分の能力を削れない物だろうかと調べている。今現在の能力は、神様が、寄ってたかって俺を改造した結果と解って居る。神ではないが、近い能力を持った今の自分なら、ある程度削れるのではないかと思う。能力を削れなくとも魔力量を削れたら、結果同じではないだろうか。

「一週間で、あんな人外な事をして知らぬ振りでは生きてゆけないだろう。絶対誰かにばれる、隠すだけでは駄目なんだ、削るか死ぬかだ、異世界で化け物として死にたくは無い」。

シュンは自分の身体を調べ始めた、魔力は何処に有るのだろうか、その供給元は何処に繋がって居るとか。執念の半年の結果、炎系ドラゴンを消し炭にしないで火傷させる程度には落せた。これ以上は無理の様、他の方法なら魔力量は減らせる。空にであろうが海にてあろうが大地にであろうが、存分にぶっ放せば良い事。シュンは毎日毎朝、八つ当たり気味に空に向かって放出している。魔の量をだが、半分ほどの深さの塩水湖となった水の上に留まって居るシュン」。

半年もこれを遣って居たら、遣って来ました神様、超不機嫌だ。

「シュン、お前はそんなに不満なのか。毎日飽きもせずに魔を空に打ち上げおって」。

「魔の量が多すぎです、今の三分の一に削って下さい。自分で削るのはもう限界です」。

「シュンはこの世界を支配したいとは思わぬのか、今はおらぬとは言え、此処に居るお前の結果を作った者のいた世界だ、好きに出来るのだぞ」。

「思わないし、大体支配してどうするの。僕だって、その気ならこの世界でも普通に歳を取って死ぬんでしょ、そんなアホな事をする訳ないじゃんマジで。それよりそんな馬鹿を言って居ないでさ、今の魔力量を減らしてくださいよ、僕は普通に器用な人で生きられればいいし、人の中で普通に暮らしたいよ」。

シュンは、神をなんとも思って居ない様だ。呆れる程ぞんざいな扱いだが、何故怒らぬ神様。

「仕方が無い、その魔力量を付けたのは私だ、望み通り三分の二を削るとしよう。しかし、言って置くが使える魔法の回数が減るぞ。それと出来る事が出来なくなる、例えば殲滅魔法とかの大魔法だ。其れでも良いのだな、もう戻せないのだぞ」。

「あー、それでも一国の魔術師団千人分の魔法量を凌駕しているから構わない、もっと減らしてほしいよ」。

異世界の子供、人の支配などしたくも無いとな、不思議な子供よの。

「人を支配して何が面白いのかな、ってか。地球の歴史じゃ強権的な支配者って、粗方悲惨な目に遭って居るじゃない。どっかの所は未だなんとか維持している見たいだけど」。

ぼそぼそ呟きながら、異世界の人間社会に向かおうとしているシュンだった。

＊＊＊＊

良し、朝晩魔力石に魔を移せば何とかなる。これで漸く人と接触できると喜ぶシュン、地球に居たなら十六歳を過ぎている。もっともこの世界では、逆にもっと幼くなってしまったシュンだった。今いるこの地域は秋の色に染まって居る、南に行こうとシュンは思って居る。

「歳は、十六だ・・・十六だ・・・くそ」。

普通の人に成ろうと思う・・・削ろう魔力量（後書き）

書き直してこれかい、・・・あう、あう。

閑話　一意味が無いそうです一（前書き）

普通の人に成りたいって・・、魔力量を削ろうと一生懸命なんだよ。

閑話　ー意味が無いそうですー

シュンの奴、何が不満なのか連日魔法を射ち上げて来る。仕方が無いので直に様子を見に行けば、魔力量が多すぎる。三分の一まで削ってほしい、だと。確かに多いが、わし等に刃向かえるほどではないし。故になんの問題は無いが、人社会で生きるには多すぎと言う。普通の人・・・それでは面白くないのだよシュン、削っても意味は無い。

「削っても、と言うか。一度に放てる最大放出量は大魔道師三千人程度までにしか制限できんな、回数は無制限じゃな。何故かは分かろう、回復が物凄く速いのだとな」。

「大魔道師三千人分って、量的に俺の最初のと比べると？」。

「お前はわし等の十分の一だったからな、言った様に三分の一に削っても意味は無い」。

「ん、戻さなかったら色々して、ひょっとして俺が居た世界に帰れたかもなのか？」。

「だからそれは無理と言ったはずじゃ、身体をこの星の世界で生きられる様に作り替えた。しゅん、お前の生まれた星の世界には、魔術魔法魔道等無かったじゃろう。ただ不思議な事に、同じ様な概念は有ったな。頭の中を覗いたから知っているぞ、だからお前の使う魔道魔術魔法はお前の知っている方法で発動する。知らなかっただろう、そう言う事でこの世界の魔を使える者達を驚かせわし等を楽しませろ」。

「けっ、勝手な事を言いやがって。・・・・・如何にコントロールするかだな」。

ふっ、シュンめ。・・・しかし馬鹿なんだな、勝手に勘違いをしてこんな大穴を。凄い事は凄いが、意味なしの事を、一年もここで遊んで意味は有ったのかの。まっ、泣くのは此奴よの、是は是で笑えるから良いか。

閑話　―意味が無いそうです―（後書き）

あー・・・・しかし・・・・なんというか。

馬鹿だった僕と傭兵団との出会い（前書き）

最初から、あれをしていればもっと早く解決していたかもしれない。無駄に一年も荒野を塩水湖に換えての引き籠り、この世界の人と接触もせず僕は本当は馬鹿だったんだと理解した。

んー、この世界の人にあってどうしよう、恨むわけにもゆかないし。恨むべき人物や国は居ないし無いらしいし。

適当に生きようかなってか、其れしかないかぁー、神様の言を信じれば帰れないんだし。むー・・・何をするか目的探しの旅に仕様、したい事が決まったら全力で楽しも～っと。

馬鹿だった僕と傭兵団との出会い

泣いた、マジで泣いた。三日三晩泣いたよ、一年が無駄になったんだからね。

「まっ、自分が馬鹿だったと言う事を承知し理解し脳に刻んだと・・・そういうこってすよ。ふぅ」。

神がここはポルイン王国、今いる場所トガル地方と言う。そう教えられた、取り敢えず人と出会いそうな方に歩いて居る。

「今、塩水湖から出て南へ普通に歩いてます。いやー、樹や草の緑がまぶしいですよ」。呑気です・・・僕はやっぱり普通に馬鹿なんだな。あ～、もう僕は卒業だな、俺って言おう。

肩には怪しまれない様に、此方の旅人風な背嚢を背負い。左腰にはショートソード、背嚢下の腰には大型ナイフ［脇差位の長さ］。右腰には当然リボルバー式拳銃型魔弾発射機、必要ないと言えばないのかな。まっ、それなりの恰好付かな。

「でっ、手には大身槍って何でですかね。二メートル以上はあるな、重いんですけど嘘です、そこそこ力持ちにされた様です。こう言った能力は削らない方が正解です、何もしなくてもすればコントロール出来るんだし」。

リボルバー式拳銃型魔弾発射機、そう言う武器は有ると神からの知識で知った。もっとも、シリンダーが回転する必要は無い。銃身内には火・風・水・土・雷・氷の六つの属性を外縁にして、更に中には光と闇と無属性二つを置いた。無属性、定義として問題は有るか

なと思ったが。体力低下・魔力削減、突っ込むなよ。与える攻撃力は三段階、射手の意識でコントロールする。そんな事を誰に言うでもなく、なんとなく口にした。

怪しまれない様にと武装はしているが、防具をまったく身に付けて居ないから、それはどうなんだとは思う。槍はハッキリ言ってとっても邪魔、例え杖代わりとしても持って歩く必要もないのになぁ～とぼやいた。

三日は歩いただろう獣道な様な道が、突然途切れて普通の土の道に成った。等と言う事は無く、探索魔法で道を探した結果だ。ここまで危険な魔物や獣が出なかったのは、自分がやらかしたあれのせいかもと思う。

「ここからが本当の旅に成るのか、魔物は出て来なくて良いぞ？」。

そう願えば出て来るのが常道、ぶもぉ～～の声が聞こえる。しかも、同時に人らしい声も聞こえるし。そして突然飛び出て来たそれは、巨大な牛の角を持った二足歩行の魔人の様。でか・・身の丈四メートルは有るぞ、その上なんだか戦っていたらしい人も出て来る・・面倒な。

「何気に・・・やっ」。

掛け声宜しく大身槍を投げた、本来投げる槍じゃないんだけど。向かってきたので仕方なくだよ、嘘だけどな。しかし命中するとは思わなかった事は事実、普通に槍は胸を貫通し、牛角の持ちの魔人らしき者は倒れた。この場合、仕事を横取りしたって言う事に成るのかな？。

「すみませ～、突然出て来たので思わず槍を投げちゃいましたぁ～。別に他意はありませんので？」。

「ほー、俺らの仕事に介入してきてそれか？」。

「ええと、どちらさんか知りませんし、向かって来られたんで反射的に遣っちゃっただけですよ」。

「俺は傭兵団、黒火の団団長、グルゴル・メト・シルニジだ。名前がグルゴル、メトは家名、シルニジは字名だ。グルゴルと呼べばいい」。

漫画的に言えば、ゴリマッチョでつるっぱげの頬から顎まで白金に近い髭で日に焼けた顔の中年なおっさん。身長だけで二メートルは超えているだろう何か、でも何か焦った様な雰囲気だ。

「あー、どうも初めまして。ご丁寧な名乗りをありがとうございます、俺はシュン・クロセ・モモタロウです［嘘だけど］よろくお願いします。シュンと呼んでいただければと・・？」。

「シュン、では確認するぞ、これを倒した権利はお前にもあるが。我らはギルドのクエストでこれを追っていた、そして発見し戦闘に成ったが此奴が逃げ出した。逃げだした先にシュン、貴様が居て倒してしまった。倒した貴様に権利が有る、だが、追って来て戦った我らにもその権利の半分は有ると貴様に主張する。それだけじゃない、あれの持つ素材の保有の権利も主張するぞ、そうでなければ是までの苦労が無駄になるし。団員にも給金を出せぬ、なんとかそれを認めてもらいたいのだが？」。

あー、此奴のクエストの成功報酬は大したことは無いが。その焦り具合から見ると、素材が貴重で高額で売買されていると。そう、全力で主張する訳だね、ありがとう、とっても参考に成りました。まっ、ここは引き下がって知り合いを作りましょうか。単純そうな人の様だから、突っ張らなければ何かと好い結果が来そうだし。しかし・・・なんか弱気だなぁ～って思うのは俺だけかな。

「団長さん、俺ががたまたま手にしていた槍をとっさに投げたら当たって。此奴が倒れて、結果死んじゃったって言う事ですよね。偶然投げたら当たっちゃった、其れだけで人様の仕事を横取りは出来ないでしょう、なので権利云々は放棄します」。

「そ、そうか、正直助かる。その代わり、我らが出来る事が有るならば手を貸すぞ?。其れと後で金貨を何枚か渡そうじゃないか、無駄働きは何かと後でもめるのでな?」。

何故か、団長さんの後ろで僕を睨みながら話を聞いて居た人がいる。でっ、団長さんのセリフにピクリと反応し、団長さんの首に手を掛けようとしている。

「団長さん、後ろで団長さんを睨んでいる方が居るんですけど～・・・怖いです」。

「ゴムギ、何を貴様睨んでいるんだ、其れにその手はなんだ?」。

「最初は良かったが、なんですかね、我らが手を貸すぞ・・はどうなんです。其処は我がでしょう、団員だって団長の一言で、見ず知らずの者に無料の奉仕的仕事は嫌でしょうよ。まっ、何枚かの金貨を渡すはこれ以上口出しをするなの止めだから良いが、相変わらずお人好しで弱気な交渉はいただけませんな。後ほどたっぷりどっぷ

りがっつり交渉術を学びましょうか」。

団長さんの顔は、一瞬で青黒くなった。

こわ～、どうやら副団長か参謀の様な、細マッチョで気配が怖い。茶が勝った金髪を肩まで伸ばしたお兄さん、端正な顔が何とも怖い表情を作り団長さんにそう言って来た。

僕は慌てて「あっ、どうも。僕シュンと言います、ひょっとして副長さんでしょうか」。

ここは先に名乗りを上げて、僕に対する剣呑な意志を逸らしましょう。

「ゴムギ・フレ・モートコートだ、団の副長謙参謀役をしている。ゴムギでよいぞシュン」。

「あの、別に頼む様な事は有りませんからご心配なく。あっ、でも皆さんが帰る途中に町かギルドが有る村でも良いですから其処まで同行させて下さい」。

「シュン、その歳で一人旅か」。

「はい、この一年は一人でした」。

「ほう、何か訳ありの様だな」。

未だ青黒い顔で余計な事を団長さんが言って来る、聞くんじゃないって、副長さん怖いから?。

「あ～、団長さん。無暗に人の訳に立ち入るのはどうかと思いますが？」。

「そうだな、団長、ここは黙ってシュンを同行させましょう。言う気に成れば自然に言うでしょうし、何気に訳も分かるかもしれませんしね」。

なんで子供が一人、危険地帯に居るのだと。剣呑な目で俺を見てくる、さっさと逃げた方が良いかな。

「団長、副長へ報告、その少年が投げた槍を持ってきましたが、この重さは異常であります。検分のほどよろしくお願いします」。

四人で重そうに持ってきた、あれってそんなに重かったっけ・・・非常に拙いっす。

馬鹿だった僕と傭兵団との出会い（後書き）

真面な文章を書きたい・・・無理だろうな。

隠す必要も無いけど、教える必要もない（前書き）

四人の部下が持ってきた俺の大身槍を、団長さんが持った。

「持てる言うだけで、これ以上の事は出来そうもない。シュン、見かけによらず力持ちだな。どうだ、俺らの団に入らないか、戦力として期待できる」。

「その槍を持てる、流石は団長と、言いたいところだが。突っ込むところはそれだけかよ」。

隠す必要も無いけど、教える必要もない

「シュン、その身体でこの槍を持ち、且ぶん投げる。物凄く不自然なと思うのは俺だけかな、ん？」。

そう言って副長が、胡乱な目を向けてくる。

「いやー、俺の一族は力持ちで・・えへへへっ？」。

「副長、そう言う特殊な一族も居るとあちこちで聞く。シュンがそう言うのならそれなんだろう、余り余計な事を聞くのも無礼だぞ、大人のする事では無いと思うがな？」。

「能天気のお気楽団長、真面にそれを信じるかよ。だがまあいい、好奇心が過ぎるのもなんだしな」。

俺は本気でホッとした。

「まっ、こんな槍だから軽くあの新種の獣魔人でも倒せたんだろうな」。

「えっ、あれって新種なの」。

「近年こういうのが出て来てんだよ、それ以前は魔獣なら魔獣、魔人なら魔人と言うのが当たり前だったんだがな」。

団長は続けて言う。

「何時頃かは判然としないが、人型と獣型が合成された様な魔人と

言うか魔物が増えた。だから、異界から魔王が来るのではないかと王都では噂に成って居る」。

「魔王って居たんだ」。

「いや、それは話だけだ。その噂の元はな、物語から来ているのさ。今は作家は捕らえられて牢獄だ、民心を恐怖に落としたって言う理由でな」。

「団長、その魔王って、その物語の中ではどんな感じだったのかな」。

「俺はその物語の本を読んだことは無いが、聞いた話では髪は銀色の毒蛇で、肌は青く目は金色で口からは黒い牙が飛び出て居て。鼻は鷲鼻で唇は黒紫色なんだとか、しかも耳たぶが肩辺りまで有るんだとさ」。

「その上頭にはでかい角が一本あって、身長は二階建ての家ほども有るって書いてあったらしいが」。

「ほう、副長は何処からその話を」。

「読んだと言う団員から聞いた話だ」。

シュンは内心ホッとした、もしも黒髪黒目だなんて言われたら、魔王決定ジャン。

「その反動なんだろうな、神子降臨ってな話も出て来ているぞ。対魔王の抑止で天界から送られたってな、黒目黒髪で色白な可愛らしい男の子とか。シュン、お前見たいだな」。

「うそ～、俺が神子～・・・俺可愛くないだろう、色白くないだろ～。髪だってよく見れば茶色も有るし、目だって茶っぽいし」。

「あはははっ、何慌てているんだよ。只の与太話だって、そんな事が有る訳ないだろうが」。

「団長さん～、心臓に悪い事を言わないでくださいよ」。

「団長、与太話で済めばいいんですが、信じている奴もいない訳でも無いだろう」。

「うーん、世の中だからな、居ないとも言えないか。シュン、用心に目は兎も角髪は染めた方が良いかもな」。

「それからその槍を持つのは止めて置け、素材は何で出来た槍かは知らないが。力持ち一族だなんて知られていないからな、身の回りから不審に思われそうな装備は外しておけ」。

「右腰のそれは魔道弾を撃つ武器だろう、それはいい、魔術師の武器に良く見るからな」。

そう言いながら副長は俺の装備品を見て回る、剣やナイフをじろじろ見て言う。

「その剣もナイフも、何か能力が付いたものなのか？」。

そう聞かれている最中、報告と言って近づいた団員にさえぎられる。

「団長へ報告します、解体を終わりました。副長、撤収か野営か指

示願います」。

「未だ日も高いし、少しでも王都に近付きたいから撤収だ。野営地は後で指示する、偵察を出せ一班で良いだろう、誰の班をだすかお前に任せる」。

「次の行動は撤収、偵察に一班を出します」。

「ん、帰りだからと言って気を抜くなと言って置け」。

「はっ」。

そう言って団員は下がって行った、話を再開したそうな副長だったが。報告の確認をしに離れて行ったが、絶対後で根掘り葉掘りと聞かれるんだろうな。

「そうだな、頭がすっぽり隠せる帽子とか布は無かったかな。おい、グパー、ケトンを呼んでくれ」。

団長は、通りがかった団員にそう呼びかけ。

「はい団長、グパーは団長の用事でケトンを呼んできます」。

来た方向へ走って戻って行った、ご苦労さんです。

隠す必要も無いけど、教える必要もない（後書き）

無駄話

シュンの従者（前書き）

「はい団長、グパーは団長の用事でケトンを呼んできます」。

来た方向へ走り出したグパー思った「ケトンは団長の前に居た子の従者にされるんだろうな」と。

シュンの従者

グパーは、幕舎用の荷馬車の前で、ロープで荷を固定し様としていた少年に声を掛けた。声を掛けられた少年はシュンと同じくらいの年恰好で、頭の髪の色は真紅、目の色も赤い。肌の色は褐色で、上背はある、シュンより頭一つは高いだろうか。ただ少年らしく、身に着いた筋肉は未だ薄い。

「ケトン、団長がお呼びだ。団長は指揮馬車の前に居る、性別の解らない子と一緒だ」。

「団長の居場所は分かった、けど性別不明の子ってなんだ」。

「聞いて居るだろ、あの魔獣人に槍を投げ、一発で殺したってい奴の事」。

「はあ、それは聞いたけど、そんな訳の解らない子がやったって言うのか」。

「ああ、団長の様子を見るとかなり信憑性は高いぞ。それと、お前への命令はきっとその子の従者指名だな」。

「マジかよ」。

「兎に角早く行け、遅いって尻を蹴られるぞ？」。

慌てて走り出すケトン、心の内では嫌だ嫌だと思って居る。去年の秋に、貴族からの狩りの手伝いとして要請が有り。団から勢子役として下っ端が十数名送られた、当然ケトンもその中の一人。見てい

ると貴族が連れ歩いて居る従者は、半分以上奴隷な感じだった。だからなんだか嫌だなぁーと思って居るのだが。

団長の前に来たケトンは。

「申告します、剣士隊見習のケトンは、団長の用事でまいりました」。

「ああ、ケトンお前は今から此処に居るシュンの従者を命ずる。魔術師見習いのリノーと弓師見習いのペピートをお前の下に置く、二人にはお前から云え。これが命令書だ、これにも二人の事は書いてあるからな」。

「え～、従者なんていらないよってか、体のいい見張りかよ」。

嫌そうに声を上げるシュン、団長の意図はそれも有って、後の半分は世話係には違いない。

「ケトン、そう言う訳だから油断なく世話をしろよな。それと付け加えておくが、快く獲物の権利を譲ってくれた人物だからな、客人として丁重に世話をしろよ」。

「復唱します。私ケトンと、リノーとペピートの三人は、只今よりシュン殿の従者を団長より命ぜられました」。

「よし、シュンは後自由にしていいぞ、俺も見回り位しないと副長に怒られるのでな」。

団長はそう言いながら馬に乗り、動き始めた馬車の先頭へと向かって行った。何か副長よりあっさとしている、多分大雑把で細かい事

や裏事など気にしない人なのだとシュンは思った。

シュンの傍に依って来たケトンは。

「シュン殿、ケトンと言います、孤児なので家名も字名も有りません。よろしくお願いします、後の二人は此処に居れば捕まえられます、宜しいでしょうか」

「あー、単にシュンでいいよ。ケトンと同じくらいの年だし、偉くも無いただの子供だしな」。

「そう言う訳にもゆきません、団長からの直接命令ですので」。

「ん～、君って堅苦しいって言われない」。

「全然御座いません」。

「あっそ」。

うー、マジで此奴見張り役をする心算だぜ、くそったれ団長め?。シュンは心の中で悪態を吐いた。

黒髪で黒目で色白な肌、小柄で性別不明な感じの子供。其れと同時に、なんかどっかで聞いた感じの容姿の子だなとケトンは思った。団の指揮馬車も動き始め、後の二人を目で探していたケトン、見つけたらしく声を上げた。

「リノー、ペピート、こっちこっち」。

手を振るケトンの傍にやって来た二人、シュンを見て目を見張る。

「ねぇねぇケトン、この子って噂の神子様なの」。
傍に来た二人の内の一人、女の子がそんな事を言う。
「それは知らないけど、お前達二人に団長から命令書が出て居る。言うぞ、二人はこれから俺の部下として一緒にシュン殿の従者をするよう命じられた」。
「げっ、嘘。なんでよ」。
「多分、俺達下っ端はもうやる事が無いからさ、態のいい世話係に命じたんだよ」。
リノーの後ろに立っていた、ペピートと呼ばれた少年が言う。
「其れだけじゃないってさ、俺の見張り役って言う大事な仕事も付いて居るらしいぞ？」。
シュンがそう言うと、呆気にとられた様なと言うか、自分でいう？それ。そんな感じの顔を二人からされた。
「こら、二人とも失礼な物言いや無礼な態度をとるな。団長直々に命じられた仕事だ、それと大事な客人と言われている。先に言った事が有ったり団長に見とがめられたりをしたら、最悪団からの追放かもな、あの獲物権利を譲ってくれたって言っていたからな、兎に角自己紹介をしろよ」。
「俺はペピートだ、敬語とかなんとかって奴は使えない。弓師見習いで、ケトンと同じく孤児だから名しかない」。

「あたいはリノー、同じく孤児よ。あたいも同じくそんなの話せない。これでも魔術師見習い、使える魔法はは火と風よ、二つも魔法を使えるのは珍しいんだからね」。

「ケトンとペピートには魔力は無いのかな」。

「二人にも魔力は有るけど、魔術師として遣れるほどの物じゃないわ。魔力は誰にでもあるわ、只戦いに使える程の量と威力を出せるかなの。しかし非常識ね、この程度の事は誰でも知って居る事よ」。

「知らない事は知らない、俺の常識とお前達との常識はずれているのかもな。別に特別扱いなんて望んでいないから言葉づかいはそれはいいよ、俺だって丁寧って言う訳じゃないし。所でケトン、俺達は歩いて車列に付いて行くのか」。

そうシュンに言われたケトンは、慌てて乗れる馬車を探す。結局、自分が仕事をしていた幕舎用の荷馬車に四人で乗る事に成った。ケトンは御者の隣へ、リノーとペピートはシュンを挟んで御者台の後ろ下に並んで座る。

「シュン殿、多分近くの村ソニエ近くで野営となるでしょう。到着するまで寝ても良いですよ、只二人は寝たりしたら駄目だからな、寝たりしたら役目が果たせないし」。

シュンは別にそんなの良いんじゃないかと言ったが、それが自分達の役目ですとケトンに睨まれた。其処へ団長がやってきて。

「シュン、槍はどうした」。

「ちゃんと収納したけど、何か？」。

「何処へだ？」。

シュンはポーチを指さすが、団長は首を傾げている。シュンは・・・

［うわ～、きも～］と思った。

「シュン、詳しい事は野営地で話そう」。

シュンは後悔した、さっさと逃げればよかったと。［人恋しかったのは事実だしなぁ～］今逃げれば、この子たちが困った立場に立たされるかもと思えばそれは出来そうにもない。

団長さん達、それを知ってどうするの（前書き）

槍をどうしたと団長に聞かれ、どうせ隠せないしってポーチを指させば。夜には尋問されそうだ、全部神様に貰ったものでぇ～すって言ったらどんな顔をするだろうか。んな事を言う訳にはいけないね。

団長さん達、それを知ってどうするの

ケトンの言う通り、傭兵団はソニエ村の近くで野営する事に成った。そう言えば、食事って一年ぶりだよな、お腹痛くならないかな。えー・・・改めて考えたら、マジで飲み食いして居ないぞ、訳を教えろ神様。思念を飛ばす、相手は神様の一人に決まって居る。

「今度は飲み食いの事か、お前は普通食べたり飲んだりは必要は無い。お前は大気に有る魔を自然と取り込んで、其れを体内で活力に換えている。ただ食べたければ人間の食べ物なら普通に食べられる、人間と一緒にいるならば、食べたり飲んだりをしないと変には思われるな。酒などは意識しないと幾ら飲んでも酔わない、毒物は飲んだり触ったりしても害は無い。其れから苦言を言うが、お前ちっとは自分で調べろ、色々と便利な物を付けたし知識も詰め込んだ。念じれば表示される様になっている、それを見ながら活用すべし」

そう言うとパッと意思が外れた、ふーん、色々と面倒なのが沢山あるなっては思って居たけど。見て確認するのがめんど〜・・そんな感じで無視していた、けっけょく叱られちまったぜぃ。

団長達の傍にいて良いのか分からなかったけど、知らないふりをして同じテーブルに着いた。

「何処にいて夕食を食べればよいか分からないから、此処で良いよね、どうせ後から色々と聞くつもりなんだろうし」。

「そうだな、俺よりもゴムギ副長が聞きたがっているな、特にそのポーチの事とか」。

「んー、これは師匠に頂いたものでってか遺品です、なので聞かれても俺は返答の使用が有りません。そう言う物だとしか知らされていませんから、師匠の名前は家名しか知りません。俺と同じクロセが家名でしたって言うか、俺は家名として名乗って良いと言われただけです［嘘だけど］字名も師匠が付けてくれました。以上です副長さん、後は聞かれても言えませんし話しませんし言う気も有りません。それより俺の事を知ってどうする心算ですか」。

「そうだな、改めてどうすると言う事は無いが。あの近辺に人家が有る等と聞いたことが無い、だからいったい何者かと思う訳だ。それにお前は見た感じ、武芸が得意な様だが魔法も使えるのではないかなと思ったわけよ。そうで無ければ、あんな重量の槍など振り回せないだろう。見掛け、その華奢な身体ではな。さて、シュンは話す気が無いと言う、団長はどうします」。

「又副長のお前から叱られそうだが、俺としたら此の儘追及等せずに。色々不思議少年のシュンを抱えて居た方が、旅先厭きずに済むんじゃないか。シュンに従者を付けたのはあれの礼だし、暇な小僧達を話し相手にって言うだけの事。どこかの国からクエストが有った訳でも無いし、まして賞金首って言う訳でも無い。団員ですらないんだ、町までなのか俺達の本拠地がある王都までなのかはシュン次第。シュンが別れを言う其れまでは、俺は客人の待遇をしてで良いだろうと思って居る」。

「シュン、一ついいか」。

「なんでしょうゴムギさん」。

「シュンの両親や兄弟はどうしている」。

「師匠に聞いたら、死んでは居ない様だが、何処に住んでいるかは分からない。お前は覚えて居ないだろうが、お前は荒野の入り口に捨てられていた。名前が書かれた羊皮紙だけが有った、捨てて行った者の後を追跡魔法で探したが振り切られた。だから何処に居るかは分からないのだと、言われました」。

「シュンの年齢だと、忘却の国併合動乱が有った時期当たりだな」。

と、団長が言う。んー、良い方向に話が逸れて行くのかな?。

「ああ、国が王や王族。貴族や国軍、国政に関わった者が一瞬で消え。民草だけが残された、それを知った近隣の国々が併合に走ったな。シュン、後に忘却の国併合動乱と名付けられた、だが誰もその国の名前を憶えて居ないのだ。記録として、遠い国に残されていたがな」。

ゴムギ副長がかぶせる様に言う。

「物凄く不思議なのは、国名を読もうとすると、読もうとする者が気絶するのだと言う。神より禁忌とされて居るのではと言われているんだ」。

「まっ、世界には不思議が未だ未だ有るのだろう。シュンの物言いの仕方を聞けば、色々と知って居る事も有るのだろうが。此処はあえて聞くまい、その方が色々と団に利益が有りそうだ、無くとも其れなりに面白そうだしの。それから三人の事は気にするな、話し相手の感じで良いと思う。出来れば友に成ってやってくれ、あれらも孤児で育ち辛い目にあっているが、特別同情等要らん。そんな育ちをしている子供は掃いて捨てる程居る、団に居るだけで未だ幸せな方だ。だが団の中の世間は狭い、これから伸びて貰わなければなら

ない子供が。狭い世間の中の事しか知らないでは困る、外の人間のお前が良い刺激を与えてくれればと思う」。

そう団長が言う、ゴムギ副長も頷く。

「団長、副長、シュン殿。食事をお持ちしました」。

そう元気なケトンの声が、その後の話の続きを断ち切る様に割り込んできた。後ろにリノーとペピートが食べ物が乗ったトレーを持って立っている。

「団長さん副長さん、俺は三人と一緒に食べるので此処は失礼いたします。色々とお話しありがとうございました、又格別に何かありましたら呼びつけて下さい」。

そう言って頭を下げて、リノーが持って居たトレーを取り上げ三人が来た方へ歩き出す。

「ああ、ゆっくり休め」。

そう団長さんの声が飛んできた。

「んー、シュンは育ち方も不思議だな。あの三人にどんな刺激を与えてくれるのか」。

「だな」。

「しかし、消化不良な感じはするな」。

「それは言うな、無理をすればあの怪力だ、それにどんな隠し玉を

持って居るかも分からない相手だ。ここは長期に付き合える方向へ持って行くのが筋だろうよ、それより団の連中に釘を刺さないとな。男だぞってよ」。

「それは無いだろう、話は確実に回って居るだろうし」。

「だと良いんだがな、あの手の子供が好きって言う奴らが何人かいるんだぞ」。

「ふん、シュンに遣られれば良いさ。俺達は野盗や盗賊じゃない、出来るだけそんな奴は居ない方が良い。団の信用問題にもなるしな、潰される方が助かる」。

「其れに嫌気をさしてシュンが団を離れたらどうする、良い機会だ、危なそうなのは先手を打って潰そうか」。

そう言いながら団長と副長は、トレーを引き寄せて食べ始める。野営地での飲酒は禁止している、何時襲撃が有るか分からないからだ。酔っていて殺されましたは笑えない。

団長さん達、それを知ってどうするの（後書き）

道中記・・・どうしよう、なーんも浮かばない。

道中記　1　そこから始めないと・・なのか。（前書き）

俺的にはお金は要らない、異次元倉庫を見れば、金貨やら金のインゴットやら宝石やらがこれでもかと言うくらい入って居る。見ただけでは、何の素材なのか分からない金属インゴットまである。

道中記　1　そこから始めないと・・なのか。

朝に成り、団の撤収作業が始まった。終わった順に朝食が始まる、シュンも撤収作業を手伝う。撤収作業の合間、三人との話は。

「俺達ってさ、雑用仕事しか未ださせて貰えないんだよ。だから三度の食事は出るけど、食べたい量じゃないんだよな」。

そうケトンが言う、ペピートは情けない顔をして頷いて居る。

「あたいは未だいいけど、育ち盛りの二人には辛いかもね。まっ、兎に角食べれているうちはいいさ。今度何時食べられるって言う恐怖は無いしね、団に拾ってもらえてあたいらは未だ幸せさ」。

「じゃあさ、小遣い稼ぎに何か覚えるかしないと駄目じゃん」。

「シュン、教えてもらうのにも何かしらの礼はしないとなんだよ、金で済めば未だいい方さ」。

「そっか、色々と世知辛いんだな」。

「あー嫌だいやだ、なんでこんな話になったんだ」。

「シュンが悪い、何か覚えろなんて言うからだからね」。

「リノー、俺が悪いのか。なら、俺が知って居る事を教えようか。主に薬草採りとか、採った薬草で薬水作りとか軟膏作りとか？」。

「えっ、シュンって薬草の事を知っているの、教えて。いえ、教え

てください」。

そうリノーが言う、その後同時に。

「「「お願いします」」」。

おっ、見事にハモッたね。一寸でも稼ぐ為の知識を身に付けられればいい事だし、三人の為にも良い事だ。薬は傭兵団には欠かせないだろうし、安価に団も手に入れられれば良い事だろうしね。

「じゃあさ、団長さんから許可を貰わないとね。黙って隊列から離れるのは拙いでしょ、規則とか有るだろうし」。

「分かった、三人で団長に頼んで来るよ」。

「俺にどうしたって?!」。

「うわっ、びっくりした」。

「あははっ、団長。間の良い所で登場しますね」。

「おうシュン、だからどうしたんだ」。

「団長にお願いが有ります」。

そうケトンが話し出す、気まずそうに本当の事を言う。

「そうか、下っ端はそんなもんだが。まっ、戦える様になったら小遣いも稼げるようになるだろうが。お前達は未だそんな事はさせられない、シュンが付いて居てそう言う事を教えてくれるのは団とし

ても良い事だ。良いだろう、副長には俺から言って置く。まっ、シュンの従者って言う事に成っているからな。隊を離れても問題ないだろう、しかも護衛がシュンなら物凄く安心だ、あっははははっ」。

笑いながら傍を離れて行く団長、さてと、どう言う風に教えようか。

「許可も得たし、最初は道端を歩きながら探そう。団長さんはああいったけど、下っ端に甘すぎるって思われるのもなんだし。その反動が君達に跳ね返って来ないとも限らない、俺が隊列の近くを君達を連れて歩く分には構わないだろう。君達は俺の従者なんだからね、荷物持ち位にしか思わないだろうさ」。

「あー、そう言う事も有るんだ」。

「まぁね、所で団には薬師とかは居ないのかな?」。

「居るけどどうして?」。

「薬師が居るなら薬草だけを買ってもらえばよい、薬草の事だけ君達に教えれば良いからね。第一薬作りまで君達と居られるかどうかだし、時間的に覚えられるかどうかだからさ。それと、要らない薬草を団の薬師に届けても良い顔をされないさ。ただの荷増やしってね、だから今どんな薬草を求めて居るか聞いてからでないとね」。

「へー、其処からなんだ」。

「リノー、薬草は草だ、火を付ければ燃える。余計な物を余り多く採り溜めて置くと、野盗や盗賊団との戦闘時。火を付けられたら延焼する、最小限の量を持ちその上燃えない工夫をしないと。団の薬師さんも当然その位の配慮はしているさ」。

「うーん、シュンって何者って言う感じだよ。兎に角薬草の姿形を知らないとね、えーと、薬師のリッテルさんは何時も五番目の馬車に乗って居るのよね」。

＊＊＊＊

「シュン、この方が薬師のリッテルさんよ。普段は優しい人だけど、怒ったら怖いんだから、怒らせないでよね」。

リノーから紹介された薬師さん、歳の頃は四十を超えたか超えないかの美人さんです。ケトンと同じ褐色の肌に緑色の髪と同じく緑の眼をしている、背は座って居るのでわからない。

「ふむ、君がシュンか。なる程可愛い顔立ちだの、この団にも変態が居るから気を付けるようにな」。

「リッテルさん、シュンですよろしくお願いします。俺って、へ、変態に狙われているんですか」。

「挨拶代わりに忠告して置く、君は自分の容姿をどの様に思って居るかは知らないが。もし他の誰とも同じような容姿だと、そう思って居るのなら大馬鹿だと言おう。不愉快な事を避けたいのなら、自分の事をもっとしっかり知る事だな」。

「は、はい分かりました。気を付けます」。

「所で、君はなんの用事で来たのかな」。

「はい、三人に薬草採取を教えようと思いまして」。

「成る程、腹っ減らしの下っ端に小遣い稼ぎを教えようと言うのだな」。

「あははっ、バレバレなんですね」。

「当然さ、何処の傭兵団でも冒険者の団でも、下っ端は辛い物さ。何処かの国の戦奴隷の様に、戦いで囮や盾にされないだけましだ。其れに、黒火の傭兵団は下っ端にだって食べる物を三度出す、他の団は二度だ、其れだけで大変な事なのだよ」。

「現実は滅茶苦茶厳しいんですね」。

「ふん、まあな。所で今欲しい薬草は、ヒロッコという薬草だ。現物はこれ、シュンが知って居る様だから別の物を採って来る恐れは無いか。後はウモンクレと言う水草系の薬草だ、も一つゴミシブサと言う蔓の木に成る赤い実だ。どれも是から通る川辺に有る、水場だから淡水に住む魔物に注意しなさい。魔物によっては買い取る、無駄に捨てたりはしないで一応見せなさい秘薬に使える物もいるからな」。

「もっと良い薬草が有ったら買って呉れますか」。

「当然だな。先に言った薬草は、傷用の軟膏を作る為の薬草だ。シュンが倒した魔獣人に、団の者が何人か傷を負っている。思ったより傷が深くてな、死にはしないが治癒するまで時間が掛かるだろう。今回は治癒系の魔術師が来れなかった、それも原因の一つでもあるがな」。

話を聞いて車列を離れ、川辺に歩く四人がいる。

シュンにとって、団の負傷者を治癒する事は簡単な事だ。だがそれをすると又騒ぎに成るのは当然だ、それは嫌だなと思う。

「団との去り際に治癒をしていけばいいか、居なくなってから騒ぎに成っても構わないし」。

そんな事をボソッと呟くシュンだった。

「所で、君達って字は読み書き出来るの、計算は出来る」。

「えっ、薬草採りに文字の読み書きとか計算が関係あるの」。

「ペピート、クエストは字を読めないと受けられない。読めずに読んでもらって、途中で肝心な所を忘れたらどうする。買い物をして、おつりの計算が出来なくて誤魔化されたらどうする。傭兵団の仕事が出来なくなって、露店ででも商売しようとしても。勘定の計算をスムーズに出来なかったらどうする、客に馬鹿にされるのがおちだし、商売仲間にも馬鹿にされるよな。それに商売を始めれば、売り上げや様々な記録をする必要になる。ああそれから、国民は国に税を納める義務が有るからね。商売人は帳簿と言う物を書けないと駄目なんだよ。読み書き計算が出来ないと帳簿を書けないでしょ、税金を納める時、同時に徴税官に帳簿を提出しないとね。脱税の疑いをかけられて牢に入れられたり、出なければもっとたくさんのお金を税として出せって言われるかもね。まっ、今の君達には必要でないかもしれないけど、歳を取ってからは大変だと思う。もっと切実な事を言えば、好きな人が出来た時、字も読み書き出来ないのって思われるの嫌じゃない。好きな子と飲み食いした時に、計算も出来

なくて馬鹿にされたら辛いよね」。

「うわーペピート、あたいも頑張るから勉強し様ね」。

「おっ、おう・・・ひぇ～」。

「俺を仲間外れにすんな？」。

「あー、三人とも読み書き計算出来ないって言う事だよね」。

無言でうなずく三人、持てる時間がどの位あるのか。後は三人がどの位頑張れるかだ、薬草を教えて読み書きをも教え。計算まで教えないといけないのか、頭痛い。

道中記　2　踏み込み過ぎかな（前書き）

薬草採りや薬等の作り方をと思ったが、彼ら三人が其れを覚えるまで一緒に居る訳では無いよな?。結局は切っ掛けを作ってやって、それ以上は彼ら次第だし彼ら自身の事。なんだか其れだけでも踏み込み過ぎな感じもする、親切の押し売りみたいな?。

道中記　2　踏み込み過ぎかな

大体が、知り合って未だ二日目位？。一寸～、馬鹿だよね、あー此処まで考えなしの俺・・凹む。

「流石川辺だね、薬用動植物が沢山だ」。

「ははっ、シュンにとってみれば全て知っているから宝の物が転がって居るって言う感じなんだろうけどさ？。知らなければ只の草だし、気味の悪い生き物だよ」。

「そうそう、俺らほんのさっきまで此処に来ようなんて思ってもいなかったんたぜ。お金に成るから教えるって言われてさ、その気に成って付いてくる。我ながらいい根性だと思うよ、でも其れ位の厚かましさや強引さが無いと、とも思うんだよね」。

「まっ、要られるだけ一緒に居るから。覚えられるだけ覚えて欲しいよ、読み書き計算だってその気に成れば覚えられるしさ」。

「シュンは王都まで付いてこられるの、あたいシュンに弟子入りしたいよ。大人で男のの師匠を持つって怖いし胆いからさ、それになんとなぁ～く臭いし」。

「じゃあ女の魔術師に弟子入りすればいいんじゃないか」。

「ペピート、甘い。師弟関係だって色々だよ、相性が悪かったら最悪なのよ。しかも嫉妬深かったらもう大変、うっかり師匠の恋人や旦那に近付くものなら、しかも師匠より年下の恋人や旦那だったら。魔法ぶっ放されかねないし」。

「うお、誰かそんな魔女を知っているのか」。

「こら、ケトン魔女言うな。女魔術師って言え、焼くぞ」。

「こえ～。とケトン」。

騒いでいる三人、一つ一つを教えられなければ未だ採れない。一度教えたからと言って、簡単に覚えられる物では無い。厭きない程度に教えて行く、小学生の自然観察野外編だね。

「おっ、沸石が有る」。

小さい河原を歩いて居ると、半透明の方沸石を見付けた。

「シュン沸石って何」。

「んー、火山活動で出来る石の一種で。魔術関係で言うなら、火山活動で出来た水属性の魔石かな」。

「特徴はどんなの」。

「色々な色が有るし形状も色々ある、ただ水を含みやすい石と言うのが特徴かな。魔石的に言えば水系魔術の放出・打消し吸収とか。後は、土属性の植物育成かな。ここいらも、昔は火山地帯だったのかもね」。

「あー・・・、へへへっ、魔石って言うなら高く売れるかな」。

「ペピート、其れこそ甘い、元火山を含めて有り過ぎだよ。だから

沸石はあちらこちらに有る、余り希少性は無いし、それ程強い力は無いし魔力も込められないね」。

「ガクッ」。

「あ～あ、だったらそんな貴重だなんて言う風な態度採らないでよね」。

「リノーは女の子だからね、宝石にしか興味ないだろうけどさ。男の子は色んな石に興味が有るんだよな、宝石じゃないけど貴石って呼ばれて居る物も有るし。貴石には魔法的に言えば安価で使える補助魔貴石だってあるし、馬鹿にしたものでは無いぞ」。

＊＊＊＊

「おっととっ、三人ともほらほら水蛇がこっちを見て居るよ。あー、リノー魔術の練習がてら狩ってみる」。

リノーは俺の声を聴き頷く。

「我が敵は眼前の水蛇、炎、風風に乗せて放つは炎弾」。

シュッポーンと言う感じで飛んで行き、ボーと燃えて直ぐ消えた。怒った水蛇が、水鉄砲よろしく水弾を打ち返してくる、同時に治癒魔法を自分にかけて居た。うーん、なんちゅう奴だ、自己治癒出来るって反則じゃん。

「張るは風壁我が前に、敵水蛇には風の刃を」。

リノーは防御の風の壁を自分の前に張り、速攻で攻撃風魔法を詠唱し反撃する。スパッとまでは行かなかったけど、なんとか水蛇を風魔法で切り裂いた。何か所か傷を負わせたから、高くは売れないだろうな。残念。

「うーん、あからさまな炎弾だったから水の膜を纏われて効果が少なかったね。風の刃は効いたけど高くは売れない状態だね」。

「シュン、傷を付けずに倒すって出来るのかな。出なければ最小の傷で」。

「出来ないことは無いね、ただ魔法のコントロールが上手に出来ないと厳しいかも。炎なら魔力を小さく圧縮して、玉の様にして同じ個所に打ち込み内部を焼くとか。風ならエアハンマーを強固に圧縮して叩き付けて潰すとか。でも敵も動いているから、これは精度の高い追跡魔法をも込めないとね。只倒せば良いと言う、戦場で使う魔法じゃないから大変だよ。まっ、こういう狩りは傭兵団に居る限り、個人の戦闘能力を高める事に繋がるが。慢心して居ると足を掬われる、敵に成りそうな相手は幾らでもいると言う事で。常に観察するという癖を付けないと」。

そう言いながら、不本意だけどリノーをサーチする。

「リノー、君をサーチしてみたけど。炎と風の両方ともブーストを持って居るよね。これ気付いてない、後サーチも持って居るよね、これは便利魔法だよ。暫く基本に戻って、自分にどんな魔法の能力が有るのか探る必要が有ると思うよ。その為には、団付きの魔術師さんに師事した方が良いと思う」。

あー・・・・、又やっちゃたかなとシュンは思ったが、すでに遅しだろう。リノーは目をキラキラさせて、シュンに迫って来た。

「シュン、あたいをお嫁さんにして？」。

何故だぁ～・・・・。

道中記　2　踏み込み過ぎかな（後書き）

石関係は大部分はねつ造です、あっ、沸石って言うのは実在します。

道中記　3　神様お休み～。（前書き）

リノーのお嫁さん発言に、思いっきりデコピンをして退けた。リノーは団の食事量に不満は無かったし、元々魔術師見習いとは云え、剣士と弓師の見習いの二人とは待遇も立場も違う。

シュン達は石を拾った後隊列に戻り、夜営地に入る。

道中記　3　神様お休み～。

三日目の夜、夜営の幕舎の寝床で。神様に念を送る。

「今度はなんだ」。

「神様あのさ、俺を召喚しようとした国は無くなり。関係した者達の記憶も操作して覚えて居ないって事に成って居たよな、そして記録も」。

「うむ、言い訳がましいが、これ以上の事は神と言えど無理と言うものだ」。

「分かった、所で聞くけど、俺がこの世界に居るというメリットは何」。

「別に我らには無いな、しいて言えばこの世界がもう少しは動いて、我らを楽しませてくれたらなとは思って居る。ああそうじゃった、それからの、あの大泣きには皆大笑いしたぞい」。

「神様の癖に、なんか下衆臭くない」。

「ほほほっ、我らに悪口を言うか。まっ、本当は別の事を言いたいのじゃろうがな」

「うん、前の世界に居た事になんの郷愁とか。肉親への思いが湧かないんだ、これって神様が操作したんだろうからだよね」。

「うむ、お前の精神が荒んではこの世界の国々へ悪影響が出るかも

しれないとな」。

「でしたかぁ～、でもそんな事をそもそもする必要って無いんじゃないの、神様権限で俺の様な者は簡単に消せるじゃない」。

「何を言う、イレギュラーな出来事とは言え、楽しめそうな要素の満載なお前を死なせたり消したりなど勿体ない」。

「じゃあ、あの異次元空間倉庫やアイテムボックスのあれらって経済支援的な意味のものなの」。

「簡単に言えばそうだ、幾ら能力を付けても人間だからな、金の要る世界に近付くのは道理だ」。

「経済的に一年位は、お金で世界を乗っ取れそうな程あるよね」。

「世界を支配したくないかと聞いたはずだが」。

「あー、そうでしたよね。だからかー」。

「ん～、今の所夢も希望も無い、そんな感じだねぇ～。やりたい事が出来たら必要かもだから貰っとくよ～」。

「ふむ、それは良いが眠くなったのじゃろうが、いい加減眠るがよい」。

「うん、神様お休み～」。

「面白い奴だな、神にお休み～か。ふっふふふふっ」。

「ああそうそう、神様頼みが有る。今の俺の事を、家族や親戚友人に、夢でも良いから見せてやってほしい。なんかこうリアルに、魔法ドカンドカンぶっ放している所とか、さっきの大泣きの奴でも良いからさ」。

「そうじゃな、夢と言う実体のない物なら可能じゃろう、むこうの神も拒まぬだろう」。

道中記　４　どうしようかな（前書き）

なんだが早く目が覚めたシュン、自分の能力を確かめている。

道中記　4　どうしようかな

ゲーム的に言えばクラフトスキルが凄いね、神様並みに何でもできる。んー・・神様能力劣化版的な感じがする。マジックスキルはもう知っているから良い、許されるのなら何か作って平和に生きよう。

「シュン殿おはようございます」。

ケトンの奴、口調が戻って居やがんの。

「シュンおはよう」。

これはペピートだな。

おはよう早いね、ん～リノーはどうした。

「リノーはあの後団長に交渉して、王都の魔術師養成学校に行く事に成ったんだよ。やっぱ基本をしっかり学ぶのは学校だろうってね」。

ペピートが寂しそうに言う、五年も一緒にいたらしいから無理もないか。

「簡単に入れるのかな、その魔術師養成学校って」。

「ありていに言えば簡単じゃあないね、第一にお金が掛かる。魔術師ってさ、魔法を操る事ばかり教わる訳じゃないんだよ」。

「へー、ケトンは物知りだね。それ以外の事って何を勉強するの、

まさか大釜の前で錬金とか？」。

「ぶふっ、確かに錬金も有るけどさ。武器や防具とかに魔術付与とか、アクセサリーに補助魔法とかなんとか色々らしいぞ。詳しい事は知らない」。

「ペピートが今言ったのは正しいか知らない、だけど其れなりにお金が居る訳。そこでリノーは団長さんに、入学金とか学校に居る間の学資だの生活費だのを貸してくれって言いに行ったんだ」。

「何処の団も魔術師は大切にされるんだ、リノーも三年間資金を貸してもらえる事に成ったのさ」。

「けどそれからが笑えてさ、副長さんからリノーは字も読み書き出来ない、計算も出来ない。そんな魔術師見習いを、学校にねじ込んだと知れたら黒火の傭兵団の恥だ。だが秋双子月＜地球の九月＞の入学には間に合わない、魔術学院なら半年後だ。今晩から俺が読み書きを教えよう、計算は薬師殿に頼んでおく。ビシビシと教えるぞ、貴様から言ってきたことだ覚悟はいいな」。

「それを聞いてリノーってば、しばらく石に成って居たぜ。王都の魔術学院ってさ、王族の子から下っ端貴族の子供で魔力を持った子が入る所なんだぜ。ひょっとして、浮浪児だった子が入学って初めてじゃないかな」。

「リノー死んだな、あいつも俺達もそんな連中と付き合える躾け受けてねぇし、無礼者って斬り捨てられるか魔法で切り刻まれるかだな」。

「副団長、ある意味残酷な人だな、リノー絶対断れないし。団長は

貴族の子だったし、礼儀作法なんてそんなの出来て当たり前の事なんだし、だから浮浪児が入ったその先の事に気付かないんだよ」。

「それは大丈夫だ、薬師殿も元は貴族の御姫様だ、半年か一年は入るまでの期間は有るからそれまで作法は身に着くだろう。最終手段、魔法で仕込む、どうだ完璧だろう」。

突然割り込んできたのは団長。

「「ぎゃあぁ〜〜」」・・・

「団長、おはようございます。子供を驚かせて楽しいですか」。

「あはははっ、そんな心算は無かったんだがな。所でシュン、単刀直入にいうがシュンに教師役を頼みたい、当然期間はリノーが学院か養成学校に入学できるまでだ。薬師殿には、行儀作法や食事のしきたりを教えて呉れる様には頼んだが。副長は忙しい、あの時なんで彼奴はあんな事を言ったのか分からんがそう言う事だ」。

「それでは俺も、傭兵団と一年は行動を一緒にするって言う事ですか」。

「否、王都の本拠地でくらしてもらう。リノーも丸一日勉強では堪らんだろう、それにこの二人も序でに頼みたい。今回団と行動を一緒にさせたが、体力が無さすぎる。だから一年は本拠地で鍛えると、そう決めたのだ、若良い命を簡単に散らさせる真似はな。あっ、教える時間は昼前だけだ。空いた時間はシュンの好きにすればいい、此奴らの午後は訓練だ。住む部屋と食事は団で提供する、なので月金貨一枚で頼みたい、どうだ」。

うーんねぇ～、一見まともな勧誘だけど、誰かに託けての早期の引き止め策ですかぁ～。でも見え見えなって言う気もします、王都の本拠地にですかぁ～。誰に売るんだろうかってか、国王辺りですかねぇ～。

「あー、残念だけど。そう言う怪しい下手な引き留め策に引っ掛かる程、流石に頭ぬるくないつもりですけどね？」

思いっきり言ってやった、どう出るかな。

「ありゃりゃ、副長に尻を蹴っ飛ばされるな～、大丈夫な自信あったんだけど」。

「これまたあっさりと、手を上げちゃうんだ」。

「ははは っ、多少はなぁ～、向かないって言う自覚しあるし？。でっ、この話断って今後王都に着いてからどうする」。

「俺は大人数での行動って苦手なんですよ、だから一人で動ける冒険者にでもって思ってます。多少はお金を持って居るし、団長さんが俺に渡すって言うお金も別に惜しくは無いし。不快な事の元が発生し様とする場からは、とっとと退散かってね」。

「そうきっぱり言われてわな、好きにしてくれ、ずっといるならそれでもいいし。知らない間に居なくなっても、それは其れで仕方が無いだろう」。

後三日程でキャッシュの町に着く、そこに冒険者のギルドが有るからそこで登録すればいい。そう言って団長さんは俺の傍から離れた、急な展開なのでどうするかは保留。朝飯朝飯ってね。

キャッシュの町　ギルド登録（前書き）

結局、受け取るはずだったお金は三人に均等に分けてくれるように頼んだ。結果、ケトンとペピートも王都に有る平民が入る複合学校に一年間団から通学する事に成った。

キャッシュの町　ギルド登録

「シュン殿、短い付き合いなのに、俺達にも学ぶ機会を与えて下さった事に心から感謝します」。

「「ありがとう御座いました」」。

２人が声を揃えて礼を言いに来た、怪しい同い年くらいの奴の従者になんかされたんだ、俺からの餞別かな？～どうなんだ。

キャッシュの町に着き、俺はやはり団から離れる事にした。王都にも今は行く気にはなれない、どうせ監視は付いて居るのだろうし。精々追跡されない様に、空を飛んで逃げようかと思って居る。まっ、幻惑を使えば別にそんな事をしなくてもいいけど。

キャッシュの町は、郊外の集落を集めても４万を少し超えた位の町だ。当然郊外の集落の方が人口は多い、街の人口は七八千くらいとか。一般家屋も商業家屋も、何故か石は石の家、木造は木造とバラバラに建っている。物語のファンタジー世界のモデルは中世ヨーロッパ、ここはそんな範疇から外れていると思う。だがガラス窓は有るし、宗教施設にはステンドグラスも有ると言う。夜の庶民の照明は蝋燭だが、？の木は１００年以上前に発見されて栽培されていると言う。文化の文明の進度が、なんだか歪んでいる様に感じるのは矢張り異世界人だからだろうか。

町の役所関係の建物を中心に、十字に道路が有り町も広がっている。役所以外はバラバラ、統一性は何処にもない。

＊＊＊＊

「おっ、ここが冒険者ギルドか。石の3階建てかって・・・、地震って無いんだろうか・・・」。

何かの鳥の羽の下に、剣をクロスさせた看板が下がっている。道路側にはガラス窓、入り口にも観音開きのガラス戸。

ギルドに入ってすぐ左に受付が有った、受付には性別不明の犬顔が立っていた。つい、繁々と顔を見てしまった。

「少年、牙族は見たことは無いのか。そんなに繁々と見られたら恥ずかしいじゃないか」。

しゃべった、飾りでも代理でもなかった様だ。声が、なんだかおっさんみたいで嫌だなと思ったのは内緒だ。

「あははっ、ごめん牙族は初めてです」。

・・・・団には人族しか居なかったし、聞いてはいたよ確かに、聞いただけなのと実際目の前にするとね～。うわぁ～って思うじゃないですか、マジで。

「どんな田舎か辺境から出て来たんだか、此処に来る前にも出会っただろうに」。

「あ～、運が悪かったらしくて出会って居ませんね」。

「そうか、なら仕方が無いな、所でなんの様かな。此処は子供の遊

び場では無いぞ」。

「え～、俺って見かけより歳食っているけどね。何歳に見えるのかな」。

「眼いっぱいで見ても、１２・３歳かな。言って置くが、１６以上でないと郊外でのクエストには出さないぞ。まして女の子なんぞはな」。

「あのねおじさん、俺って言って居るよね自分。普通俺って言うのは男の子でしょ、それに顔とか骨格で性別分かるんじゃね・・？」。

「何を言う、郊外の集落の女はガキでも俺って言うぞ。その歳位なら絶壁も居るし、尻の小さいのはざらだ。それに俺は２５だ、おじさんではないぞ」。

「何を言う、２０歳過ぎたらおっさんが常識ジャン。おれはしっかりと１６だ、？地球年齢で？」。

「ダイル、何を騒いでいる」。

後ろから声が掛かって俺は振り向いた、おっさんの後ろには数十人の男女の冒険者らしい人達が居た。

「あっ、ハンク職長、この子が歳を１６で性別で男と言うんですよ。確かに肩の上がり具合とか、肩幅なんか其れらしくも有るし。でも着て居る物を細工して居ればぁ～・・とか」。

「う～ん、儂にもそれは物凄く無理が有る様に見えるが」。

ハンク職長と呼ばれた男が、俺の周りをまわりながら俺を見る。何故か見ている後ろの冒険者たちも、うんうんと言う風に頷いて居る。

「ち、ちくしょう、何か・・男のシンボルを見せたら信じるのかよ」。

俺は頭にきて、思いっきりズボンと一緒に下着を降ろした。そしてドヤ顔で言ってやった。

「年の割にはでっかいだろ、毛だって生えているぞ」。

冒険者達が居る場所から、何かが倒れる盛大な音がした。二人は呆気にとられた様な顔をして、そして盛大に笑い出した。

「分かった、確かに男だ・・認めるからとりあえずそれを仕舞え、俺はそれを見て喜ぶ性質は持って居ないぞ」。

ズボンを引き上げると、冒険者たちの方から幾つかのため息が聞こえた・・・背中に汗が流れる様な感じがしたのは気のせいか。

ダイルと呼ばれた受付のおっさんは、受付のテーブルにしがみつき未だ笑い転げている。

「うむ、まあ・・あれだ認めよう。ダイル、何時までも笑って居ないで仕事をしろ」。

そう言って、ダイルを拳骨で一発殴り、ハンク職長というおじさんは受付から去った。心なし笑って居る様に見えるのは俺の勘違いかな?。

「き、君は見た目より大胆なんだね。初めてだよ君みたいな子は」。
そう笑いながら手続きを始める。
「まず冒険者ギルドの説明だが、何処まで知って居るかな」。
「黒火の傭兵団で大体の事は聞いてきた、冒険者と傭兵の違いだけだね」。
「そうか、傭兵は国に半分位拘束された様な行動しか出来ないが、その分国からの援助と保護が有る。冒険者は国に縛られない、自由に動けるがその分国からの保護等はない。ギルドランクと団の人数は傭兵とは少し違う、冒険者の団は最高人数で３０人以下しかどの国にも有るギルドでも認められていないが。戦時には傭兵団は後方支援を含めて１０、０００人以上認められている、平時は後方支援を含めても５、０００以下、実際は平時にそんなに傭兵が固まって居たら。国から攻撃されるがな、反乱でも起こすのかって。
冒険者ギルドに登録できるのは１２歳からだ、１５から始まりの１１までは町の中か村の中クエストを受ける資格しかない。１５歳は頑張ってもレベルは１１、まっ、魔物でも侵入して戦い倒したら褒美に１ランク上がる位だ。幾ら倒してもと言う注釈つきだがな。だから１６歳のレベルは１１～１２からだ、最高位は当然１だが。突破っわ有る、レベルは０」。
「えっ、０ですか。なんか変ですね」。
「んー、まぁな。其れよりも、１６歳がギルド初登録の場合関係なくレベル１５から始まる。但し外のクエストは受けられる、レベル１０までは一つ上の、１１レベルは二つ上。下は一つ下しか受けら

れないから注意しろ。ただクエストを受けて居て、途中上位魔物や魔獣に出会い倒せばレベルが上がる事も有るが。まあ、食われたくなければ全力で逃げろよな。以上だ、だが登録は無料となっているが。病気や怪我以外で、申し出が無かったら一年間なんのクエストも受け無い奴のカードは没収や末梢されから一応覚えておけばいい。理由はギルドが儲からないし、死亡しているかと判断されるからだ、ギルドにも職員が居て建物等に経費は掛かるからな」。

「分かった、登録します」。

「ではこの用紙に、最低名前と年齢、扱える武器と使える攻撃魔術を書いてくれ。住んでいる場所とかは要らない、どうせ宿屋とかだろうし。当然だが、攻撃魔術は使えなければ書かなくて良い」。

シュンはこの世界の人は普通、魔法は二つくらいまでしか使えないのが知識として有る。それ以上はエルフや特定獣人しか使えないのだとも、ただまったく居ないのかと言えばそうではなく居る事は居るし居たしなのだが。人族には超珍しい部類だとか、シュンは何処から見ても人族だ、だが異世界人でもあるし・・・。

「仕方が無いな、癒しの能力が有る光と、広範囲攻撃能力のある雷だな。でもなぁ～、風も便利なんだけどな、なんとか誤魔化せないかなぁ～・・・んー・・ダイルさんいいかな」。

「どうした、まさか三個以上の魔法を使えるなんて言うなよ。程度は有るが、三種類以上の魔法が使える人族は国に報告する義務がギルドに有るんだ。まぁ、程度って言うのがミソだけどな」。

「生活に使える程度なら、ギルドで報告を止めるだけの度量は有るって言う事？」。

神様に仕込まれた知識から拾うと。

「あ～、そうか～。それ以上は魔術師でなく魔道師に成るのか、魔道師は国に仕える義務が有る」。

それは嫌だな、そう思い逃れる方法を知識から拾う。

「あ～、ねぇ。魔力検査してよ、生活にしか使えない程度なら見逃せるんだろ」。

「ほー、あんまり誤魔化す気は無いって言う事と沢山の系統を使えるって言う事だな。だがそれは形式的に無理」。

「戦いとかに成れば、どうしても色々持って居れば使うでしょうが。派手に使ってばれて、ギルドの責任に成ったら俺的にも不味いし。ギルドも沢山使えるけどしょぼかったから報告しませんでした、ギルドも誤魔化されましたって言う。一寸苦しいいい訳も出来るんじゃないですか」。

そんな言い訳の位は出来るでしょ、の、目で言うと。

「ん～、別にそれは書かなくったっていいのだよ、誤魔化したければな。後でばれても責任はギルドにはない、ギルド加入者全員の魔力検査なんて国からキルドに義務付けられていないし。ばれても個人の責任に成るはずだぞ、もっとも国だって魔道師相手に、なんぞ仕掛けようなんて思わないだろうさ」。

「どうして」。

「魔術師以上に魔道師って気まぐれで高慢ちきで傲岸不遜な奴が多いんだよ、国王を気に入らねぇって殺してしまう魔道師が結構居たんだよ。そんな奴を抱えようって本気で思うかよ、危なくって殺したくなるだろうさ。けどもしそうなったら、双方只では済まないって言うのが定着しているんだよな」。

「おう、そんなに酷いのかよ。だったら俺も傲岸不遜で生きようか、って言いたいけど無理。絶対子供が頑張って威張ってるって、としか思われ無いし、すっげーぇ生きにくいだろうし」。

「まっ、当たり前にそうなるな。相手にする奴はくだらない奴らが多くなるし、真面な奴には相手にされないし。それに気が付かないのが大半だとよ」。

書き上げた用紙を差し出す。

「ん～、じゃあ是で」。

「おう、武器は剣と槍、魔術は風と水と雷か。あ～そうだった魔術の程度はな、団に入る時に口頭でリーダーか最低限の関係者に言えばいい。よし、これを持って赤の窓口に行きな、登録は其処でする」。

「えー、此処で登録じゃあないの？」。

「勘違いするな、受け付けて話を聞いて説明して書かせる。ここは暇なんでな、それで是だけをするのさ」。

「キャ～、めんど」。

ギルド、赤の受付で喧嘩するシュン（前書き）

「おう、武器は剣と槍、魔術は風と水と雷か。あ～そうだった魔術の程度はな、団に入る時に口頭でリーダーか最低限の関係者に言えばいい。よし、これを持って赤の窓口に行きな、登録は其処でする」。

「えー、此処で登録じゃあないの？」。

「勘違いするな、受け付けて話を聞いて説明して書かせる。ここは暇なんでな、それで是だけをするのさ」。

「キャ～、めんど」。

そんな事を言いながら赤の受付と書かれた所へ行く。

しかし、獣人に初めて出会ったのに。動揺が無いのは何故だ、これも神様仕様なのかと思った。

ギルド、赤の受付で喧嘩するシュン

「こんちわっす、登録に来ました」。

赤の受付には、何故か顔を赤らめた人族の少女が座って居た。髪は薄い金髪・・レモン色とでもいうのかな。色白で、目は薄い緑色をした子で。鼻の頭の少し上に雀斑が少し散って居て、其れが愛嬌に成って居る。要するに、美少女と言いたいのだ。

「は、はい今日は、ご苦労様です。用紙を渡していただけますか」。

「はいは～い、どうぞ。俺はシュンよろしくね」。

用紙を手渡すと、何処からか水晶の様な球体を俺の前に置いた。

「私はミクリと言います、どうぞよろしく。ではギルドカードを作りますので、この水晶に手を置いてください」。

ゲームの世界だね、マジで。球体の水晶に手を乗せて、待つこと一分ほどだろうか。

「はい、終わりましたから手を放して頂いて宜しいですよ。是がギルドカードです、魔力を少し流しますと持ち主を特定致します。他人が成りすまして悪用されない様に、の対策です。後は此れを読んでいただければと思います、本日のはご苦労様でした」。

差し出されたのは、ギルドカード説明書なる物だった。ん～何か、突き放された感じかな。そりゃね、「可愛いい女の子」に読んで説明してもらった方が、嬉しいじゃないですか。

「か、可愛いだなんて・・・すみません、一応規則ですので」。

「えっ、声に出していた」。

「はい、思いっきりハッキリと」。

「おい、○○○出し小僧、何受付の子をナンパしてんだよ」。

割り込む様に後ろから声が掛かった。むっ「なんだボケ、話中だぞ」。

「思いっきり声に出て居るぞ、あ〝っ小僧」。

顔に、真横に入った切り傷のあるおっさんが立っている。身長２メートル程の大男で、体重は１６０キロは有るだろう、相撲取りかプロレスラーの様な体格だ。右腰にはショートソード、左腰には長剣が下がっている。その上、背中には身の丈以上は有るだろう程の大剣を背負っている。ただ着ている服の上下がボロボロだ、その上何かの動物の血だろうか、こびりついた様にあちこちに付いて居る。なので異臭までするると言う状態だ。

「誰あんた」。

「小僧、俺の名前を知らないだと」。

「馬鹿だな、此処はギルドの登録受付だ。初心者のな、従って俺があんたを知らないのは当たり前なのさ。でっ、その馬鹿なおっさんはなんで俺に声を掛けたんだ」。

受付の少女ミクリの顔が真っ青なになった。

「ほう、威勢がいいのか馬鹿なのか。まっ、馬鹿なんだろうかな。俺の名は、ジャッス・ビス・セメルグと言う、二つ名は土竜殺しのジャッスとも呼ばれているな」。

「ぶっ、二つ名だって。それも自分でも名乗るってどうよ、恥ずかし〜。どうでも良いけど離れてくれないか、汚いし臭いからさ」。

「小僧」。

その声と同時に、ブンと言う音がした、ジャッスが右の拳を振るった音だ。

その拳をパシッと軽く左の手の平で受け止め、右こぶしでジャッスの打ち込んできた右腕の肘を殴りつけた。バキッ、と言う音と同時に肘から変な形に垂れ下がった。

「ぎゃあぁぁぁぁ〜〜〜」。

大男に似合わない大声で悲鳴をあげたジャッス、みっともない。

「何の目的で俺に近付いたのか知らないけど、ただの弱い者いじめが目的だったのなら。序でに左の腕もやっとくかな、あ〜でもこのままでも冒険者廃業だな。右肘粉々だもん」。

入り口の受付席からダイルと、騒ぎを聞きつけたらしいハンク職長が飛んできた。肘を押さえ、みっともなく泣き喚くジャッスを見た二人。

「ジャッス、子供だと見て嘗めてかかりこのざまに成ったのか。その肘の様子じゃあ、治癒魔法でも元には戻らんだろうな。ギルド登録の抹消をして行くかジャッス」。

ざまぁ～みろとでも言いたげにダイルが言う。

「ギルドの中で四度目にして是か、ジャッス、もう狩りには出れんな。外でも散々若いのを嬲って来たんだ、今度はお前がその立場に立つ。どんな目に遭わされるか、覚悟をするんだな」。

そう言ったのはハンク職長。俺の方を見て、呆れた様に言う。

「シュンは見掛けに寄らず喧嘩っぱやいんだな、しかも相手構わずのな。このジャッスはギルドレベル６だ、それを一撃でか。ふふっ、土竜殺しの男を壊した少年ってか、はっはっはっは」。

「強いなシュン、規則で出来ないが、ジャッスのレベルの上を付けても良い位だな」。

ポリポリと、鼻の上を掻きながらそんな事を言うダイル。何時の間にか集まった冒険者達、何故か目をランランと光らせシュンを見つめる。多分、仲間にしたいと思って居るのだろう。駆け出しとは言え、ギルドレベル６の男を壊したのだから当然だろう。

ギルド、赤の受付で喧嘩するシュン（後書き）

格闘とか、戦闘の場面を書くってマジしんどい。実生活で喧嘩なんてしたことが無いし、まして戦闘・・・ないしぃ～～。

喧嘩の原因なんて些細な事

「でっ、そもそもの原因はなんだったんだ。彼奴があれだけの怪我をしたんだ、凄い原因が有るんだろうな」。

「う～ん・・・なんだったっけ。ミクリちゃん覚えてる」。

「えっと、え～・・」。

真っ赤になってもじもじしているミクリちゃん、マジ可愛いです。

「あ～・・・思い出した、あいつってばレディーの前で卑猥な事を言いやがったんでカッと来たんですよ」。

既にギルド内の医療室に運ばれて居ないジャッス、治療が終わり次第追い出されるだろう。

「レディーってミクリの事か、って・・たったそれだけであれか」。

「否、ハンク職長。軽く小突かれる位なら別にって思うけど、ブンは無いでしょ。避けたって、当たるまで全力で来たでしょうし。あ～、それからすっごく臭かったし。でも可笑しいですよね、稼ぎだってそこそこあるだろうになんですかあの身なりは」。

「成る程、正当防衛だな。そんなのは決まりきった事だな、博打に稼ぎを注ぎ込んでの事だ」。

「それっていかさま博打って言う事ですか」。

「ふっ、取り混ぜて居るだろうな。博打打の常道だぜ、シュンも嵌まるなよ」。

「其れよりジャッスって、魔法はどうなの」。

「ああ、使える事は使えるが、戦闘には強化魔法をうまく使っていたんだろうな。魔力そのものが少ないって言う事だ、だから魔法でシュンに仕返しを仕様にも出来ないだろうな。そっか、だから博打で騙せるのかぁ～・・・・・なんだかなぁ～・・」。

「ダイル、だがな、魔法の支援なしで地竜を倒す彼奴は凄い奴なんだが。一寸調子に乗り過ぎてシュンにやられた」。

「知ってます、ハンク職長。彼奴の性癖、サディストの両刀使いだって言う話ですよ」。

「なっ、・・・だから男女取り混ぜてなのか」。

「げっ、ひょっとしてそっちの用で俺に話しかけて来たのかな。うえ、悍まし～。ねぇ、悍ましい序でに聞くけど。彼奴ってこれからどうなるのかな、腕をぶっ壊した本人が聞くのもなんだけど」。

「恨みの有る奴に狙われるな。利き腕をやられたんだ、左腕でだけであの大剣は振り回せないだろうし長剣一本だって難しいだろう。戦えないのは目に見えている、恨みのある奴らが何処まで追い込むかだろう。なぶり殺しか飢え死にだろうよ、例えそうなってもシュンのせいでは無いな。何れ、歳をとって衰えたら同じことに成るだろうさ、行いが行いだし同情や憐みは無用だ」。

「・・・ひょっとして、ミクリちゃんを狙っていたんだけど俺が近

づいたので焼き餅って言うか、横取りされるとかって」。

真っ青な顔から、今度は真っ赤になったミクリちゃん。そんな様子を見て、ニャニャ笑うハンク職長。

「ほー、色男な発言だな、ナンパの心算かシュンよ。ミクリの親父さんはギルド長だ、心して口説けよな」。

喧嘩の原因なんて些細な事（後書き）

なんかギルドから出られない。

ギルドの歴史とシュンの能力（前書き）

シュンは、勧誘の為ににじり寄って来る冒険者の輪から逃げる事に成功。街にただ一つある高級宿の一室に居る、金はなんぼでもある、どんとこいと選んだ宿だ。間違っても半端な冒険者など泊まれない、一泊金貨五枚の宿泊料金だ。

ギルドの歴史とシュンの能力

「金ぴかって言う部屋じゃないけど、其れなりに落ち着いた色合いの部屋だな」。

寝室と居間と応接室が有る、居間のソファーに座って居るシュンがボソッと独り言。安宿に泊まって勧誘に押し駆けられたらたまらないし、だから此処に来たのだが。当然一見のシュン、しっかり前金でと言われ、三日分を支払った。

あの後、彼が居なくなって困ることは無いのかと尋ねたら。ど田舎のギルドだが、隣国と王都との通商交易路線上にある街なので。強い冒険者が結構通るから大丈夫、それに王国軍の衛士連隊の駐屯地も近いしと言う。

シュンは今、ギルド登録係のミクリちゃんから手渡されたギルドの本を読んでいる。

「ギルドの歴史、大陸共通歴ファータイル大陸１２４９年・７月。各ギルドとの交渉の結果、オウル王国の王都、クラーラで会議が開かれた。議題はただ一つ、自由の勇者冒険者ギルド設立。以前から提携の有った者同士、然程の混乱は無く統一された。

薬草他植物採取採集ギルドと。薬用昆虫・動物採取採集・と、狩人のギルドの食肉・薬用胆採取。魔物討伐ギルドの有用部位採取・採集と、山岳鉱物採集キルドの採集採取の全部門を統一し。第一次冒険者ギルドとして出発したが、翌年には各ギルドの戦闘部門を加え、又新たに探索者ギルドの全部門をも冒険者ギルドに組み込まれた。

冒険者ギルドの統一意志で（一国家に干渉されない、させない、組みしない）とされた。一時期、ギルドと各王国間での武力衝突等が有ったが。高い能力を持ったギルド員に、各王国の文系高官が集中的に暗殺される事態に成り。各王国は自由冒険者ギルドを公式に認める事に成った、ファータイル大陸１２８２年一月、各王国の王都で自由冒険者ギルドと王国側との交渉が纏り。王都所在の四神教教会大司祭立会の元、誓約書が交わされ、誓約書の原本は教会管理となり現在に至る」。

「王国弱、ってか・・ゲリラ戦とテロか。・・・今大陸歴何年なんだろう」。

「えーと、自由冒険者ギルドのお仕事とギルドランク」。

？　依頼された魔物と魔獣の駆除討伐。

？　依頼された猛獣と害獣の駆除討伐。

？　依頼された動植物の採集採取。

？　街人や村人からの依頼実行。
（主に雑用仕事と農作業と子守等）

？　依頼された護衛の遂行。

「う～ん、なんか脳筋仕事が多くないか。討伐とか討伐とか・・」。

ギルド内における個人のランクと登録年齢制限。

登録は男女１２歳から、１２歳から１５歳までは町内や集落内の雑務。

最低位は１５ー最高位は０となります、受けられる仕事ランクは。
持ちランクの一つ上か、一つ下に成ります

ギルドカードをポケットから出して表を見る。

？　氏名　　シュン・クロセ・モモタロウ。

？　年齢　　十六歳　　性別　男。

？　ギルドレベル　１５。

「ぎゃー・・モモタロウって、あはははっ。仕方ないなぁ～」。

カードの裏には。

？　武技戦闘職　技能全て有り。武器全て使用可。

？　魔法戦闘職　魔道師　　体力　３，０００，０００　魔力量
３０，０００，０００

？　魔法技能職　全て使用可

？　錬金技能職　全て可能　注　生命の創作は出来ない

？　特殊超能力　呪い浄化・呪い祓い・呪い付・呪い移動・霊体浄化・霊体祓い・霊体神送り・死霊浄化

？　総合幸運度　Ｌｖ１０００

「召喚魔法に無属性魔法・・・あれっ、何時の間にこんなのが。無属性魔法で何が出来るんだろう、えっ、３，０００，０００ええっ３０，０００，０００・・・・有るかボケェ～～～」。

余りの数値に、シュンは愕然としてしばし思考停止した。

「削って貰ってこれかよ、「人外認定」だって、好きに遣れって言われても」。

引き籠れって言うのかよ、恐ろしくて人前じゃあ使えないじゃん。シュンは項垂れ、本気で引き籠ろうかと考える。

「誰も住んでいない土地か島は無いかな、人恋しくなったらどこかの国の町で露店めぐりとか」。

幸い、姿を隠し空を飛ぶなど簡単に出来る「空を飛んで人のいない島ってのを探そう」考えるのももう嫌になり、シュンはベッドに潜り込んだ。

ギルドの歴史とシュンの能力（後書き）

あー・・もう、少しでも独自性を出そうと思うと四苦八苦。色々と、他小説の方々と被らない様に頑張ってはいるんだけど。本音、思いっきり被らせてほしい・・お願いして設定をもらっちゃおうかな。

?神達に貶された?　　そして旅立ちの前　1（前書き）

不貞腐れてベッドに入り早々に寝た、夢にまた神様達が出て来た。

?神達に貶された?　　そして旅立ちの前　1

「神様達、なんか俺のカードを見て笑っていたよな。あいつ等マジで腹腐って居やがるし、今度はなんだよ」。

そう独り言を言い、ベッドから降りてカードを手にして裏を見た。

「カードの上で神様達が笑っている」。

そして一人が俺を指さした、カードの上に文字が出た。

「バーカ、お前は儂等の劣化版。ＨＰ・ＭＰ以外は意味が無いぞ、好きに出来ると言っとろうが」。

「命を作る事と、死者を蘇らす事以外は何でも出来る、そう言ったはずだが」。

「まったく話を理解せん馬鹿じゃの」。

「今更だけど、消した召喚者達が気の毒になって来たわ」。

言いたい放題じゃん。

むかついたのでカードを床に叩き付けた。

帰れないと言う事以外は、なんでも出来る。

「・・・でも、俺にとってそれは無意味な事。なんでも出来るなら何もしない選択だってある」。

＊＊＊＊

宿の部屋で朝食を取り、ギルドに向かった。今日はギルドのクエストを受け、時間に余裕が出来たら旅の用意を仕様と思う。明後日の朝には旅立ちたい、行き先も目的地も無い。ただ流れるだけの旅、たった十六でこんな経験をするなんて思わなかった。

ギルドに入り、クエストの掲示板を覗く。レベル１５のクエストなんて、近場で雑草に近い薬草採り位しかないだろう。そう思って見て行く。

「ん、隣国王都までのキャラバン隊の護衛募集か。但し回復魔法が使える事」。

「おっ、シュン護衛の仕事に就くつもりか。だったら紹介状を書くぞ、ギルドレベル最低でも実力は有るんだしな」。

ハンク職長がそう声を掛けて来る。

「ハンクさん、レベル最低の此処に張り出すってどうかと思うんだけど。この街では、こんな事当たり前なのかな」。

「今回このキャラバン隊の専属の魔術師が同行できない、特に治癒と回復が使える魔術師がだ。冒険者の方にも余力が無いので緊急クエストだ、レベルに関わらずの募集だから人数は特に制限は無い。募集日数が無いしな、なので全レベルの掲示板に張ってあるのさ、シュンは使えるのか」。

「ああ、其れなりに使えるけど。どうしようかな、あっ、出発は明後日の朝なんだ」。

「こっちに戻ってくる気持ちが有るのかどうか知らないが、このキャラバン隊には同行できるのならそうしてほしい、隣国の一般市民との友好を兼ねたキャラバン隊なのでな」。

「積み荷は何なんですかね、豪華な物ばかりで野盗や山賊に狙われやすいととかは？」。

「んー、どうだろう。キャラバン隊の連中だけで２５０人、護衛の冒険者グループが４隊１００人以上だ。襲うとすれば、其れなりの大規模な野盗か山賊だろう、向かう方にそんなに大きい団は居ないと聞いて居るぞ」。

「聞いて居るね、・・あー・・絶対いない訳じゃないって言う事だよね」。

「キャラバン隊の話を聞いて、そんな奴らが集まらないとも言えないな」。

「あ～、じゃあ受けるよ。丁度旅立とうと思って居たし、話を聞いて知らないふりで。後味悪い結果を聞いたらさ、なんか寝覚めが悪いじゃない。居れば、助けられたかも知れない命が有ったかもと思えばね」。

「シュン、お前の実力はギルドも解って居るからな。同行する冒険者の奴らも喜ぶだろう、生存できる確率が跳ね上がったんだからな。でっ、肝心な貰える金だが」。

「はいはい、下っ端なんだからやっすいって言いたいんでしょ。良いですよ、さっきも言った通り旅に出る心算でしたから。賑やかでいいですよ」。

「ははっ、そいつはどうもだな。まっ、魔術師は気まぐれ傲慢が通りだが。お前は治癒も回復も使える魔剣士とでも言って置くか」。

「ええっ、その方が無難でしょう」。

紹介状を書いてもらう必然性も無いのだが、待遇が少しでも良くなるのならと、書き上がるのを待っている。

暇そうなダイルと目があい、近寄ると言う。

「キャラバンと一緒に行くのは良いが、馬車は席が固いから尻が痛くなる、毛布の一・二枚持って行った方が良いぞ」。

「あ～、ありがとう。気が付かなかったよ、馬車かぁ～・・・自前の馬車でも買おうかな」。

「ほう、金持ちだな。一頭の馬付きで安くっても金貨十枚だぞ、箱馬車なら天井知らずだ」。

「小さい幌馬車で良いから欲しいな、其れだとどの位するかな」。

「そうなると二頭立てだな、？だって結構な重量に成るし、ただ誰かの荷を積ませれば少しは浮くだろうな」。

「ん～、そんな都合よくは行かないだろうと思うよ。馬二頭分の餌

や水も必要だろうし・・あ～・・俺ってば馬車の操縦できない。なんちゅうこっちゃ、馬しか買えねぇジャン」。

「あっははは っ、だったら誰かに教わればいいさ」。

その誰かに教わればいいの声で、クエスト、馬車の操縦を教えてくださいを出した。

「シュン、その前に馬車と馬の確保だな、最低でも一頭は馬は付いて来るが」。

「あのさ、馬が曳くから馬車だけど、傭兵団で使役していたトカゲって買えないの」。

「買えるが高いぞ、馬の十倍はするな」。

「それって人を乗せて走ったりする、馬の傍に近寄ったら馬が怖がらない」。

「あー、それの条件付きなら馬の二十倍に成るな。怖がらないな、馬の方も慣れているから」。

「そうか、騎乗出来る竜を一頭と馬車一台と馬二頭だな」。

でっ、何処へ行けば買えるとダイルに聞くと。

「シュン、お前って何処の貴族のお坊ちゃまだ」。

使役できる竜なんて、王都近郊の竜専門の牧場でしか買えない、この街で帰るのは馬だけだと言われガックリするシュンだった。買え

るような雰囲気で答えるダイルが悪いと言えば。

「さっさと行かないと良い馬が買えないぞ」。

そう躱されてしまった。

ギルドの外に出て、暇そうな十二歳位の男の子に声を掛けた、どうみても浮浪児だ。

「暇そうだね、君馬車屋知って居たら案内してくれる」。

「良いけど、小銀貨くれる」。

「高いな、１０ジェンコだ」。

「結構距離が有るんだぜ、４０ジェンコ」。

「其処の露天の食べ物一つ奢る、２０ジェンコ」。

「そいつは嬉しいね、３０ジェンコ」。

「面倒臭い奴だな、２５ジェンコ」。

「仕方ないな、それで良いよ前金な。おいらグルコ、家名も字名も有るけど今じゃ浮浪児だ」。

「分かった、兎に角何を食べたい」。

「串肉がいい、腹もちが良いから」。

露店で串肉を焼いて居るおじさんに。

「おじさん串肉二本ね、この子に一本渡して」。

串肉を売って居るおじさんはグルコに、今日もなんとか生き残れたようだなと言った。

「もう少しで１２歳だ、そしたらギルドに入れる」。

「小僧、其処からだよ、生き残れるかどうかが決まるのはな」。

そう、おじさんが串肉を手渡しながらグルコに言う。

一本５ジェンコの串肉、安いのか高いのか・・・おじさん生活出来ているのって聞きたい。

食べながら二人で歩く、キャラバン隊の仮事務所が馬車屋の隣。都合よすぎるって言ったら、馬車屋の隣が都合がいいのだと言う。？なんで？と聞いたら行けば分かるとダイルが言う。

「なあグルコ、馬車屋の周りには何が有るんだ」。

「そいつは只では教えられないね」。

「むっ、１０ジェンコ」。

「有り得ない、１銀貨」。

「それこそ有り得ない、実際聞かずに見れば分かるんだし２０ジェンコ」。

「あっ、其れは無いだろ半銀貨と２０ジェンコ」。

「メンドい奴だな半銀貨」。

「よっしゃ、半銀貨で」。

神へ?怒?・・・と、馬車屋まで。（前書き）

グルコと歩いていて、突然有る事に気が付いた。ギルドカードのあれって。対人用で、あれはあれで良かったんじゃね。そう思ったら何か心の底から?怒?の感情が立ち上がった。

神へ？怒？・・・と、馬車屋まで。

グルコは、突然立ち止まった俺の怒りを見て、忙しい奴と。

「兄さん、俺何か悪い事言った」。

「別にグルコを怒った訳じゃない、声を掛けるまで下を見て居てくれる」。

「分かった、何だかわからないけどそうする、＜だって今のシュン怖いもの＞」。

＊＊＊＊

「神様共のくそったれぇ～～～～」。

創造魔法、死竜のうんこ一山。転送先神様の食卓、うん、絶対俺は悪くない。

＊＊＊＊

シュン、遣り過ぎだぞ、当分と言うか場所を作り替えないと」。

「ぎゃあぁぁ～～～～、なんてことをしてくれるの、結構気に要っていたのよ」。

「お～う、シュンえぐい仕返しをするな。しばらくは流石に人間の様に食を楽しむ気にはならんな」。

「シュンの奴め、あの世界に行ってから性格変わったのか」。

「顔の割にやる事が・・・とほほほほっ、気に入った場所だったのに」。

どうやら神様達は、シュンを咎める気は無い様だ。

＊＊＊＊

憤怒の思いで送り込んだけど、神様達があんまり怒って居ないのには逆にびっくり。まあ、二度目は無いだろうと言う事はシュンも理解している。

「グルコ、もういいよ。それから俺はシュン、お兄さんと呼ばないでこっちで呼んで」。

「えっ、シュン。あれっ、土竜殺しのジャッスの右肘をぶっ壊したって言うの・・」。

「うん、俺だな」。

「ひぇ～～、もっと年上でごっついあんちゃんかって思ってたよ。シュン様でいい」。

「却下」。

「じゃあ年上だからさんで」。

「ああそれで良いよ、急ぎの時は呼び捨てで構わない」。

「分かった」。

へぇ〜・・・わぁ〜〜とか言って騒ぐグルコ、いい加減にしてほしい。

そうこうしているうちに、改めて周りを見渡せば倉庫群と何か市場の様な建物が点在している場所に近付いた。

「あー、そうか。馬車屋が先か市場と倉庫群が先か知らないけど、寄り合う必要はあるな」。

「あっ、解ったんだ。でも馬車屋が先って聞いたよ。あっ、あそこが馬車屋、主はパッドレーさんで。字名は名乗らない人だからその心算で」。

「何か理由が有るのか知って居るのか、その情報に大銀貨一枚」。

「うわっ、いきなり奮発だね、理由は有るんだろうけど。パッドレーさんの先祖は竜人でね、今で十代目らしいんだとか。俺達人族の字名って、竜人にとって真名って言うらしいんだ。うっかり其れを名乗ると、名乗った相手に支配されかねないんだって。あっ、野生のドラゴンには戦って勝って、名前を付ければ使い魔に出来るよ。千人其れやって九百何十人は食べられたとか、シュンさんはそれ遣りそうだね」。

グルコに大銀貨を渡しながら、考える事は一つ。

「よし、何処かで気に入った竜が居たら戦って使い魔にするぞ」。

「おまけに教えるけどドラゴンって、隣の大陸にしか居ないんだよね」。

グルコが訝しそうにシュンを見る、普通この世界の者で大人なら誰でも知って居る事。流石に神様も、こんな雑学的な事までは記憶に入れなかったらしい。

「あー、シュンさんはもう案内は要らないね」。

「そんな事は無いぞ、嫌でなかったらもうしばらくは付き合えよ。俺もこの街には知り合いは少ないしな、案内人と言うか話し相手が欲しいのさ。明日一杯はこの町に居るし、きちんとお金は渡すよ、だから頼めるかい」。

「えっ、いいの。お金は無理のない程度で良いから・・・で、でもなんで俺なの」。

「んー、話していて嫌な気がしなかったからかな。それと、騙して何処かに連れて行こうって言うそぶりも無かったし。頭も根性もそれ程悪くないなって思ったからかな」。

「シュンさん、そう言って呉れるのは嬉しいけど。一寸人が良すぎない、もっと疑おうよ」。

「でも、今のグルコって誰かを騙そうって言う気はないだろ、其れだけで充分さ」。

「ありがとう、明日一日だね」。

「今日はこの後も付き合ってもらうよ」。

「分かった」。

そう答えたグルコ、お金の話は持ち出さなかった。そして今、俺は馬車屋の前に居る。

はぅ？。

そして馬車選び（前書き）

馬車屋を目の前にして、シュンは有る事に気が付いた！？。

はぅ?。　そして馬車選び

「俺って、馬車作れるじゃん」・・・・はぅ?。

馬車屋の前で固まってしまったシュン、俺って・・・「心の中で泣き叫ぶ」。

「と、兎に角色々と見て参考にしないと、どんな馬車があるかな」。

「何気に無理して居る様に見えるのは俺だけかな?」。

「あはっ、あはははっ・・・・グルコそれ言わないで?」。

馬車は、雨避けと風よけの屋根と壁が有る小屋に収まっている。一頭立ての荷馬車から、六頭立ての箱馬車まで五十台は並んでいるだろうか。

「へぇ〜、グルコ、こうやって見ると壮観だね」。

「市場が有るせいか荷馬車が多いな、シュンは箱馬車が良いのかな」。

「拘りが有る訳じゃないけど、寝場所を馬車に求めるなら小型の幌馬車かな」。

「大型の馬なら一頭でいいね、変に二頭立てだと馬同士が合わないと扱いにくいし世話も大変だよ」。

「そうだね、そうすると四輪の馬車より二輪の馬車かな」。

「あっ、シュンこの馬車良くない。軽そうだし長さもちょうどな感じだよ」。

グルコがそう言ったのは、金属で枠組みがしてあり。幌で屋根や外観を覆う様になっている、小型の馬車だった。

「うん、いいね、是でいくらなのかな。最低金貨十枚と聞いて居るけど、それじゃあ買えそうにないなぁ～」。

「馬なしなら金貨七枚で良いぞ、馬付きなら十二枚だ」。

突然後ろから声が掛かった、グルコは飛び上がって驚いたが。シュンは知って居たので平然としたものだった、悪意を感じなかったから知らぬふりをしただけだ。

「馬を何処からか調達しないと駄目ですよね、見た感じでは、近くに牧場が有る様には見えませんけどね？。えっと、ここの店主さんですか」。

「ああ、私が店主兼工房主のパッドレーだ。少年、ただその馬車は近距離用だ、長距離には向かないな」。

パッドレーは、見事な赤毛を頭髪に持つ大男だった。太っては居ない、未だ五十は行って居ない歳だろうか。

「長距離用だと小型と言っても隣の馬車だな、一頭立て用だから軽めに作ってあるが、見た目よりは頑丈だぞ。車高を低めに設定して

ある事と車輪も少し小さい、その分取り回しは楽だと思うが。馬付きで金貨十枚でよい」。

「パッドレーさん、馬は自分で選べるんですか」。

「ああ、青い屋根の厩舎の中に居る馬からならな、他の厩舎の馬は与って居る馬だ」。

「では馬を見せて下さい」。

「それでは馬車を買うと言う事だな、冷やかしでなくて良かった、わっはっはっは。年若い者が馬車を買いに来るのは珍しいし、まして君位の歳の子は居なかったのでな」。

「ギルドのクエストで、隣国へ行くキャラバン隊に同行することになったのですよ。理由は知りませんが、治癒系の魔術師が同行できないって言う事で急遽ね」。

「全員がか」。

「その様です、心当たり有りますか」。

「無くも無いが、言って良いのか悪いのか・・なのだが。ん～・・・・実を言うと、キャラバン隊の隊長に当初町一番の腕利き魔術師が成る事に決まって居たんだが。横やりが入ってな、横やりを入れた奴が町長の息子でな。この息子が魔術師嫌いと来た、魔術師嫌いの訳を聞くと、昔魔術師の女に酷く振られたらしいのが原因らしい。横やりでへそを曲げた魔術師も町長の息子も両者子供じみた事でな、わりを食ったのはキャラバン隊のメンバーさ。治癒系の魔術師が居ないと大変だ、途中魔物や野盗が出ないとも限らない、怪我をしな

ければ良いだけの事だがそれ程道中は甘くないだろう」。

あれぇ～、町長の息子って・・・うわぁ～べたぁ～～。

「両者馬鹿ですね、怪我人や死人が出たら、両者は一生恨まれるでしょうにね」。

「分かっていての事だ、だがギルドとしては見過ごせない、だから慌てているんだろう」。

「あー、帰りはどうするんだろう。俺は付いて行くけど、付いて帰っては来ないつもりなんだけど」。

「向うで募集するんじゃないのか、十日は居るはずだし」。

「魔術師嫌いの隊長に付いて行ってねちねち何か言われるの嫌だな、俺はこの町の人間じゃないから関係ないしばっくれちゃおうかな」。

「おいおい、それじぁ困る人が出るし、下手をしたらギルド手配で追い回されるぞ」。

「いやいや、どっちにしても行くと言ったしね。仕方ないか、馬車に籠もるしかないかな」。

そんな事を話しているうちに厩舎に辿り着いた、厩舎の中をのぞくと、三十頭は居るだろうか。

「常時これだけの馬が居るんですか」。

「いや、この半分は儂個人の馬五頭と使用人の馬十頭もいる。君に売れる馬は向こうの馬達だ」。

奥を指さすパッドレー、十何頭かは居るのだろう。

シュンは、奥の方から何か剣呑な気配がするのを感じた。

竜鱗馬とグルコの臨時就職（前書き）

シュンは、奥の方から何か剣呑な気配がするのを感じた。

「パッドレーさん、奥の方から殺気が飛んでくるは気のせいでしょうかね」。

竜鱗馬とグルコの臨時就職

そうシュンから問いかけられて、肩をすくめてパッドレーは言う。

「希少種の、竜鱗馬が一頭いるのだ。気性が荒くて買い手が付かなくてな、これ以上経費も掛けられんのでな。屠殺して、経費を浮かせるしかないかと思って居る」。

竜鱗馬・ワイルドドラゴンホース、神が戯れに作ったという竜と馬の合成馬。空は飛べないが、頭部に風魔法を発する事が出来る風刃兜が生まれながらにして付いてくるのだと言う。そして後ろ足にも蹄だけでなく打撃用のコブが付いて居る。その上成体馬なら、兜の刃だけででも襲って来る敵を切り刻む事が出来ると言う。

良く見れば、首には馬用の隷属の首輪を嵌めている様にも見えるが？。

パッドレーさん曰く。

「あの隷属の首輪の効果はほとんど無いのだ、ただ魔法攻撃をしないだけでな。だから首のあれは、多分隷属の首輪でなくて。魔封じの首輪なのかもしれん、買い取ってから分かったのだがな。もう、蹴りに来るし噛みつきに来るし、手が付けられないのだよ、当然買い手なんて付くものか。シュン、お前さんが説得して見ないか。希少種の馬を殺すなんてもったいなさすぎる、野生に返せば狩りの対象にされるだろうからな」。

馬を説得しろと言われても・・・やってみるか。竜鱗馬に念を飛ばしてみる。

＜えっと、君、俺の念拾える＞　＜＜なんだ人間の子供、ん、念を使えるとは・・むっ、只の人では無いか、神の祝福が強いな＞＞

＜あ、ども。それより此の儘だと君は殺されちゃうよ＞　＜＜ふん、だからどうした、我も只では死なん＞＞

＜でも君、魔法を封じられているんだろ、それじゃあ隣に居る馬よりは強いかも知れないけどさ、其れだけじゃないの＞

＜＜ぐむっ、だがこの頭の兜と脚が有れば戦える＞＞　＜人間がそれを許すとでも、無駄だよ、君が魔法を使えない今ならあっさり殺されるね＞

＜＜なに、侮辱するか人間の子供＞＞　＜そんな得にもならない事言う物か、事実だろう、解って居るはずだよな。其れよりさ、俺と旅をしないか、此処に居るより絶対良いと思うよ＞

＜＜う～ぬ、殺されるのもしゃくだ。人間の子供、なれば我と契約をしろ＞＞　＜どう言う意味の契約かな＞

＜＜仕方が無い、主従の契約で良い。我に名を付け、少し血を舐めさせるがよい＞＞　＜名前か～、俺ってあんまりネーミングセンス無いらしいんだよな＞

＜＜余り酷いのは嫌だぞ、言って置くが我はオスだからな＞＞　＜ん～、見れば分かるぞ、人間の様に服を着て居る訳じゃないしな＞

何故か噛みつこうとして来る、ひょっとして、一言多かったのかも。

＜フリーダム、余計な装飾は要らないね。フリーダム、意味は自由・・どうだ＞　＜＜う～む、よかろう。さあ、血をよこせ＞＞

シュンは、左人差し指の腹を、右人差し指の爪に風魔法の鎌鼬を小さく纏わせ斬る。出て来た血を、フリーダムに嘗めさせた。フリーダムと名付けた、竜鱗馬の身体が少しだけ光った。

「シュン、今光ったのは竜鱗馬と使い魔契約をしたからかな」。

見て居たパッドレーが、そう言って来る。

「しかし殺さずに済んだのは良いが、売買契約も済まない前に馬と使い魔契約。シュン、下手をすると馬泥棒で縛り首だぞ。馬代金貨３０枚だ、勝手に馬と契約するなど無謀にも程が有る」。

「え～～、殺すしかないって言うからさ、焦ったんだけどぉ～～」。

パッドレーの顔を見ながら、普通金貨３０枚で等買えない馬んだろうと諦めた。

「あ～あ、仕方ないや勉強と思うしかないよね。でっ、さっきの馬車とで４０金に成らない」。

「おいおい、あの馬車は金貨１５枚の値段だぞ」。

「うそん、だって埃を被っていたじゃないか。毎日手入れもしない馬車なんて、毎日値が下がるって言うもんじゃない。あ～いっそこのグルコを馬車磨きに雇わない、そうしたら金貨４５枚支払っても良いかも」。

「うーむ、そう来たか。確かに毎日は馬車磨きなど出来んな、グルコ、後何か月でギルドに入れる」。

「後三ヶ月ほどでギルドに入れる歳に成ります」。

「ふん、でっ、読み書きは」。

「二年程、読み書きの計算の教習に通った事が有ります」。

「そうか、それでこの町に流れて来たのは」。

「二年ほど前です、両親も兄弟も親戚も有りません。僕、一生懸命馬車を磨きます、お願いします置いてください」。

そう言って頭を下げたままのグルコ、一日一度の食事でも良い、厩舎の軒下でも良い。取り敢えずどんな形ででも生きたいと思うグルコだった。

「シュン、その通りだ、手入れもしない商品など値が下がる一方だな。うん、その指摘に対価を支払おう。グルコを半年雇おうと思う、その先はグルコと私で話し合うかな。グルコが考えて、馬車工房の職人に成りたければと言う事だよ。まっ、馬車磨きばかりでなく、厩舎の掃除の手伝いに、工房の方でも仕事が有れば手伝わせる。その代わり、食事は一日三回工房でとらせる。給金は、小遣い程度に成るだろうが、無いよりマシだろう。育ち盛りだ、夜食だって食べたいだろから。それから寝場所は厩舎の休憩所でいいだろう、夜は無人だしな、ただ火の元には気を付けろよ」。

グルコはそれを聞き、膝を地面に付け泣きじゃくった。何と言う幸運、一浮浪児には過ぎた有り得ない幸運と。

「グルコ、良かったな。仕事には手を抜かず、先へ先へと気を配って頑張れよ」。

「シュンさん、この幸運はあなたに出会ってからです。この幸運のお返しは、一生懸命誠意を持って働く事と思います。ありがとうございました」。

「ほほっ、グルコは難しい言葉も使えるのだな、客人、良い拾いものをしたのは儂かもな」。

早速グルコは馬車の手入れ道具を渡してもらい、馬車を磨き始めるのだった・・・五十台の馬車、磨き切れるのだろうか?。

工房に、馬と馬車の売買契約書を交わす為入る二人。

「シュンは魔術師か魔道師のどっちですかな、それとグルコには魔力は無かったですかな」。

「表向きは魔剣士を名乗って居ます、グルコは簡単な土と風に水位は使えるようでしたね、馬車磨きには便利かな」。

「三種の魔術ですか」。

「んー、伸びても器用貧乏に終わる位の魔力だね。馬車職人を目指した方が良い位さ」。

＊＊＊＊

買った竜鱗馬のフリーダムと、馬車の調整で宿に帰ったのは夕方。

フリーダムは指示すれば、お任せで走るので御者要らずだった。馬車は宿の車庫へ、フリーダムは馬房へ。

竜鱗馬（前書き）

神との念話で、フリーダムの事で分かった事が有る。「あ奴の先祖から数百代前に忘れているが、あ奴らは飛ぶと言う意味でなら飛べないが、空気中を走り回ることぐらい訳は無いのだがの」。

「しかし、シュンは言う事とする事が不一致な子ね。目立ちたくないとか言っていて、目立つことばかりするのだから」。

竜鱗馬

そう言いやがった。

「金貨３０枚で買える様な馬じゃないぞ、儂が人間ならその何百枚も支払っているだろう。兎も角わしから馬に言って置く、飛ぶのとは又違った面白さが有るじゃろう」。

そう言われて想像するに、確かになぁ～、またがっての空中散歩・・・ヤバいすっげぇ楽しみになったよ。別な意味で目を付けられるかな、体色も青みが勝った虹色で。つるつるとした手から感じる感触は何とも言えない、手入れは水で手拭きをすればよいとの簡単さ。それに、重量荷馬の１？５倍は有る馬体は地球重量でいえば二ｔに近い様だ。少し運動不足なのかな、ちなみに雑食で肉だって食べるのだと言う。

「あっ、そうだ大きな布を身体にかけて、余り目立たない様にしよう。貴族なんて奴に絡まれたら面倒だし、あ～・・しかし今まで良く貴族に目を付けれらなかったな」。

目は付けられていたが、パッドレーと言う人物に恐れをなして手を出せなかったのが本当で。シュンと言う子供の手に渡った以上、遠慮は要らなくなった、シュンは厄介ことを背負ってしまった。使い魔契約をした以上、奪う行為は無駄だのだが、どれくらいの輩が理解するかは分からない。

フリーダムの世話を終えたシュン、朝食後は馬車のカスタマイズに取り掛かった。外観の見た目は、小型の只の幌馬車との幻惑が掛かって居る。実際はの内装は、リムジン以上ではないかとシュンは自

負している。

「下手に中を見せられないな、荷物で一杯ですって見せないようにしないと」。

そうぶつぶつと呟くシュン、だがある意味抜け作なシュン。だから、其れは無駄な事だろうと誰かが思ったらしい。

「オイ、フリーダム・・なんか呼びにくいな。フリーで良くないか」。

「好きにしろ。で、我にそれを曳いて走れと言うのだな」。

「重量の軽減魔法を掛けてある、引いたまま空中だって走れるぞ」。

「それを楽しむのはシュンと言う訳だ、我には何も良い事等無いではないか」。

「コモツミ草の根を沢山仕入れる、どうだ」。

「シュン、何故に我の好物を知っている」。

「むふふっ、昨夜のうちに神から聞いた、酔っ払うんだって」。

コモツミ草とは、地球のマコモに良く似た植物だ。

「人間でいえば酒の様な物だ、だから夜に食べさせてくれればよい」。

「へぇ〜、酒を知っているんだ」。

「当たり前だ、だてに３００年以上生きてはおらんぞ」。

「えっ、ひょっとして爺なのか」。

「馬鹿者、頭に竜が付く呼び名の我だ。後三百年以上は生きるぞ、何事も無ければの事だが」。

「成る程、今が働き盛りなんだ。嫁さんも欲しい所だね」。

「うむ、其れなんだがな。我はこの大陸で生まれたのではない、隣の大陸で生まれた。隣の大陸には我の同類が未だ沢山生きている、出来ればそちらに渡ってほしい」。

「こっちが煩わしくなったら渡ろうか、それに目的が有ってこっちに居る訳でも無いし」。

「うむ、当てにしているぞ」。

＊＊＊＊

コモツミ草を買いに市場により、馬車一杯に買い異次元倉庫へ、見て居ただけでは馬車に積んでいるとしか見えないのだが。竜鱗馬のフリーダムは嬉しそうだ、シュンは明日の予定を確かめにギルドに立ち寄った。

町長の息子（前書き）

竜鱗馬との使い魔契約をしたけれど、他には出来ないのかなぁ～と助平心で確かめた。そりゃな、沢山持てば良い訳では無いのは分かってますよ。制限なしってどうよ、過保護臭いって思ったのは俺だけ・・・誰の過保護って・・あれらしか居ないじゃん。

町長の息子

過保護フラグになんだかなぁ～と思いながらギルドの裏に馬車を置き、表から入って行く。

「ダイルさんこんちわ、キャラバンの出発予定は変わって居ないでしょうね」。

「予定は変わって居ないが、治癒と回復を使える魔術師が足りない、手を回されてんだろうな」。

「町長の息子って言うのを、何とかしたら何とかなるのかな？」。

「何とかしたら交渉の余地は出来るだろうけど、今度は町長が怒鳴り込んで来るだろうな。町長は国王指名領主としての町長だし、仮にも子爵位の貴族だし、背後にマリハ侯爵が居るからな」。

「あらら、その侯爵の事は知らないけど結構メンドクサイ奴なんだ」。

キャラバン隊の皆も、心配で集まってきている様でギルドの中は人がいっぱいだ。

＊＊＊＊

ガヤガヤとした、ギルドの裏口の扉が、ドンと言う音共に開き誰かが飛び込んできた。

「裏に有る馬車に竜鱗馬が繋いであるが、その馬車の持ち主は誰だ」。

［そんな凄い馬がギルドの裏に何故いるんだ、それも馬車付きで］ぼそっとダイルが呟いた。

「は～い、俺ので～す」。

元気よく答える俺、体調は万全です、意味ないけど。

「こ、子供。貴様、子供が戯言を言うな」。

「だって、これ契約書だよ」。

そう言って飛び込んできた男に見せる、もちろん渡したりなどはしない。

「子供、私はこの町の町長。子爵、スビーザ・スクッジ・サオオ・エテカが長男シング・スクッジ・キューカで有る。あの竜鱗馬は、私の様な高貴な家の者が手にすべき馬である。少年、ゆえに即刻私に譲り渡すがよいぞ」。

「やなこったば～か」。

「子爵家の者を侮辱するか」。

「馬鹿だからば～かと言った、本当の事を言って何処が悪い」。

「おのれ、皆の者。この子供を捕らえろ、子爵家を侮辱をする等言

語道断、処刑じゃ」。

「お前自身が子爵家を穢して居るじゃない、処刑じゃ」。

「おのれ何をしているか、早く捕らえ牢へ繋げ」。

「待ちなさい、子爵家の小僧」。

そこへ一人の老人がやって来た、ギルド長のベルロビだ。

「ハテ、シング、聞くがの。この国で高貴なお方と言えば国王陛下と王族の方々、多寡が町の長である子爵家の馬鹿息子が高貴等と。戯言を言うと、家名断絶領地のこの町も没収、さらに一族全て断頭台の露と消えますな。その覚悟が有っての物言いか」。

「私はこの町ではと言っただけだ、国の等と言ってはおらんぞ」。

「ほう、確かこの町には、王族タミンサ様が居られるがの。老いた王族など高貴ではないとでも」。

「い、いや、それは」。

「この事は、タミンサ様にもお知らせする。沙汰が有るまで、父子爵の元で謹慎をして居るがいい」。

「し、しかし、キャラバン隊の・・

「馬鹿を言え、隊長などその少年の方がふさわしいじゃろうの。お前と違って優秀じゃ、なにしろあの竜鱗馬の主だからの。うむ、シュン、そなたキャラバン隊の隊長に成りなさい。隊長と言っても護

衛隊の隊長じゃ、畏まる仕事など無いのだからな。どうじゃ、皆は、地竜殺しの男を一撃で使い物に成らなくした奴じゃ。足りん所は皆で助けてやればよいし、副隊長にギルドからハンク職長を出すぞ。それとシュンの力はギルドが保障するぞ、但しギルドランクは１５だがの」。

ギルド内に爆笑の声が響く、笑い声の影で。引き連れて来た家臣に引きずられ、ギルドを出て行く子爵の息子。誰一、人目を向ける者は居ない。

＊＊＊＊

「俺聞いたぞ、傭兵団黒火の奴にだけどよ。槍を投げ、一発で新種の魔人を倒したってよ。背丈だって団長の倍も有る奴だったって」。

「誰だそんな与太話をした奴は」。

ギルド長が耳元でささやく「観念しろ、その情報は儂等にも届いておる。早くここを発たないと、王都から召喚状が来るかも知れんぞ。

「ゲッ」。

「異論は無い様だな、決定、シュン・クロセ・モモタロウは今日からキャラバン隊護衛隊の隊長だ。ミレータ団長もフォローをよろしくな、それから黒火の傭兵団から支援が有った。治癒と回復の魔法を使える術師たち十人を派遣するとな、故に明日の朝出発は変わらん」。

「おぉ～、黒火の傭兵団からの支援が。さっきの話は、まるっきりの与太話ではないのだな」。

「すげぇ～～」。

＊＊＊＊

キャラバン隊の関係者の子供達だろうか、密やかに等とは縁遠い声の高さで話している。

「すげぇ～～って、竜鱗馬を見に行こうぜ。馬車屋、パッドレーさんの所に居るっては聞いてたけど。貴族様にも見せなかったらしいからな」。

「でもよ、そんな馬を未だやっとギルドに入った子が手に入れられるんだ」。

「う～～～ん、謎だな」。

「不思議っ子シュンには神様が付いて居る、故に竜鱗馬なども簡単に手に入る。王族でも、貴族でも無い、ましてや大商人の子でもない少年シュンが。神様の馬と言ってもいい竜鱗馬を買うお金が何故あるの、それと、髪は隠しているけどあの目。謎だねぇ～～～、髪までもし同じ色だったら・・・」。

「おお、おおおっ・・・なのか。なのかよぉ～～～～

そんな子供達の傍から、一人の少女が立ちあがって去っていった。

そんな後姿を見た少女が。

「今の子って誰、知ってる子だった」。

そう訊ねた少女に、全員首を横に振った。

訊ねた少女は、ふしぎだなぁ～とは思ったが、直ぐに忘れた。

竜鱗馬の姿に魅せられて、ただほぉ～っとため息を吐いている。

町長の息子（後書き）

今日ほど、こういう物を書き始めた事を後悔した日は無い。
すんませ～ん、二話・四話は閑話に変更したっす。

―ばれてる茶番は面白くない―（前書き）

キャラバン隊の護衛隊隊長就任、シュンはただ笑うしかなかった。

―ばれてる茶番は面白くない―

「だって茶番だしな」誰にと言う訳では無く、ボソッと零した一言。

ギルド長がああ言うからには、ギルド長が真に所属する何処かの誰かか国にとって。非常に拙い奴がこの国に居ると言う事、その不味い奴が俺自身と言う事をシュンは理解した。と、言うか。ギルド長の心を読んでしまった、彼は隣国の諜報員”虫”と、言われる者だと。

ギルド長、ベルロビは焦って居た。この少年が正体不明だが途轍もない人物と、傭兵団に居る虫からの報告と。彼自身が見た事実、故に本国が是からこの地域に攻勢を掛けようと言う今。懇意になった傭兵団の危機を知れば、おのずと加勢をしたくなるのが人情。道案内の浮浪児を、馬車屋の下働きに送り込む程の人たらし。これ以上この町に置くのは拙い、故に茶番としか言いようのない事までしてのけた。

ギルド副長ハンクは、そんなギルド長の茶番は理解していた。ただ、冒険者ギルドの所属員は、決して一国の味方や戦争に加わってはならないと言う事を。特にシュンは異常だ、傭兵団での彼の事を、ハンク自身の情報力でそれを掴んでいる。故に、ギルド長とは別の思惑でハンクはシュンを連れ出そうとしている。

シュンは、自分自身の秘密を秘密で無くしてしまうおのれの行動に、遣っちゃったと思うだけ。

「姿形なんて変えられるし、別に色々ばれても困らないし、逃げる手段は沢山あるし」。

「弱みを掴まれたら」・・・・そう考えたが。

神様の劣化版。異世界移動とか命を作るとか・死者蘇生とか以外なら何でも可能。

「無駄な行為だな」。

どっかの神殿か、どっかの教会が、神子様って言って追いかけられるのも嫌だよな。

「そうなったら遊びに行って、厭きたら潰す・・・有りだな」。

＊＊＊＊

「シュン、用意は良いのか」。

そうハンク職長、職長ってなんの職長と聞いたら。ギルドランク６の、ギルド討伐隊職員（普段は別の仕事をしているので職員なのだそうだ）の隊長だと言う。違反ギルド員の捕獲や逮捕、そして死刑執行の討伐。

「俺の方は今からでも構わないよ」。

ギルド職員が植えたのか、シュンが居るギルドの馬車止めの横にケビウと言う実が揺れている。地球でいうアケビの様な形だが、真っ赤な色だ、充分熟し甘いにおいを振り撒いて居る。

「そうか、することが無いのなら、宿に戻って休んでいいぞ。ただ酒は飲み過ぎるなよ」。

「俺、酒は未だ飲んだことは無いよ。飲む気も無いし」。

「それは残念、旅の途中にでもと思って居たのだがな」。

「酔っ払って言質取られたくないし」。

チラッとハンクを見るシュン。ハンクは目を見開いて苦笑する。

「なんだ、ばれて居る様だな。だが俺は無粋な真似はしない心算だ、まっ、上が判断しきって居ないって言う事も有るがな」。

「その上に伝えといて、気に入らない事をしたら全力で潰すってね。当分は、俺はのんびりこの世界を旅したいだけだからさ」。

「当分ね、確かに聞いた、伝えよう。だが、多少訳の解らない事を言って来る奴も居るだろうがな」。

「多少ね、・・・・あ～、身ぐるみ剥いでも良さそうな奴を見繕ってね。ん～、功徳をさせてあげたいから」。

「ぷっ、財布代わりか」。

「いいじゃん、どうせいい加減な事を言って巻き上げた奴だろうし」。

「確かに」。

「あっ、言っとくけど神子じゃないからね、俺は。四柱の神様のからは、我らの劣化版っては言われているけど」。

にゃっと笑うシュン、ぞわっと背中に何だか分からない汗を流すハンク。

「ヤバい事をしない様に、お告げって言うのを頼めないか。それはとても俺一人が伝えても、一笑にもされない事だ」。

「ん～、基本的にあいつ等って無責任見たいなんだよね。そんなことするかどうか分からないよ、放っておいた方が面白そうだと思ったらそんな事しないだろうね」。

「そこをなんとか」。

「う～ん、言ってはみるけど、聞いてくれるかは分からないよ。隣国へ行く旅の途中にでも、色々と仕掛けて来ると思うんだよね。俺が右往左往するのを見たいからってさ、ほら、俺が槍を投げて殺した化け物だって。あるいは奴らの仕業じゃないかって俺は疑っているんだけど、今の所、何も言って来ないからハッキリは分からないけど」。

ハンクは、自分ではもう処理しきれない話に、顔色が悪くなっているのを感じている。そして追い打ちをかける様にシュンが言う。

「ああ、ギルド長に言って置いてくれる。面倒くさいから、この町に手を出すなら潰すって、上に伝える様にってね。知り合いもこの町に出来たし、守ってあげても良い様な奴にも出会ったし、ね。あー・・・それにしても、ばれている茶番って、面白くないよなぁ～」。

「ギルド長にか」。

「虫って言って今の話をすれば通るよ」。

「それを何処から」。

「ぶふっ、決まって居るじゃん」。

嘘だけど、心が読めるって言ったら誰も寄っては来ないだろうし。

この程度は、神様の方に押し付けても良いだろうな話しだ。

―ばれてる茶番は面白くない―（後書き）

小説を書いて居る人は、俺以外は神様だと思う。

其れと同時に、本当に読むだけなんて簡単だよな、読み専なんてある意味損をしているのではないかと思う。妄想爆発馬鹿丸出ししても、批判されない手段があるのに。ただ自分自身を許せなくなるかも知れないけど。あー・・俺は単に厚かましくも恥知らずな人間です、だから其れがどうした、っても思ってる。

色々と書き直してはいるんだけど、脳みそに欠陥有り過ぎ、だれるぅ〜。

旅　　―激闘だ四十五日のキャラバン隊―（前書き）

色々と抱えたシュン、其れでも四十五日の旅が始まった。

旅　　ー激闘だ四十五日のキャラバン隊ー

キャラバン隊の団長？・・・当たり前に護衛隊の隊長が道中の指揮を取ればいい、馬鹿が居なくなったのだから団長なんてのは要らない。キャラバン隊の長と補佐は商工会の代表と副代表の事だ、我々二人が動くのは向うに着いてからなのだから。
キャラバン隊の各責任者との顔合わせ、冒険者の団のリーダー、サブリーダーとの顔合わせ。おバカなシュンには一度に沢山の顔なぞ覚えられるはずもなく［目が回る］と言って逃げてしまった。

目的地まで、およそ千八百キロと距離が有る。なので護衛隊は半数が騎馬で半数は馬車、キャラバン隊の皆は馬車。先頭は護衛隊の馬車で徒歩戦闘員が六名乗って居る、内二名が魔術師。その後ろに縦列四属四段式魔道鏃自動矢装填バリスタ搭載馬車、鏃には其々の属性魔法を込めてある。最大飛距離十二キロ、秒速五百キロ以上、一弓毎分二百四十本以上。矢の本体中心には水銀の玉が入って居て、命中すると衝撃で更に深く食い込むようになっている。ノックには風魔法の加速をフェザーには安定を掛けてある。恐ろしいのはそれだけでは無い、矢は四属性矢四弓一斉連発発射できるという。言わば軽機関砲の様な物、ただ対魔物や魔獣になら確実に有効だが、対人戦闘の場合は最初に集中攻撃される。攻撃型の魔術師や魔道師が少ないグループが持ち出す武器だが、人員的余裕が無ければ使えないと言っても良いだろう、何故なら戦闘中には矢の補給が大変なのだから。＜こういうの、本気で突っ込む人はいないと思うけど、マジに居ないと思いたい＞

護衛隊編成

徒歩戦闘グループ五十名［前衛・中衛］騎馬五十名［抜刀騎馬隊二十五名・弓十名・弩・五名・攻撃支援騎馬魔術師十名］それ以外に［攻撃魔法支援・魔法防御魔道師五名］馬車要員［十台四十人、輜重員三十名、後方治癒師二十名。バリスタ搭載馬車四台人員二十名］当初より二倍近くかなり人員が増えたが、キャラバン隊の人員を考えれば少ないとも思うが仕方が無い。軍でいえば、一個中隊以上二個中隊以下の人員だ。進行時の徒歩隊は、体力的に人族より勝る牙族が主体で、騎馬隊はその他の獣人族が主体だ。其れでも人族は人数的に多いので頭出している。

シュンは隊長等と言う事に成ったが、実際の指揮はハンクが執って居るしそれで良い。経験の無い者が偉そうに口を出せば、速攻で崩壊するだろう。傭兵団とは違い、随分と少ない人員の冒険者達の団の寄合。最大でも小隊程度の三十人以下だろうか、其れでも一部傭兵団からの派遣魔術師も居るので、人員は多いのだが。

「シュン隊長、報告はしっかりと聞いてくださいよ。編成はこうで、配置の方も指示してありますが。元からの人員がばらけて居ます、なので道々徒歩隊と騎馬隊との連携訓練、魔術師と弓と弩の遠距離攻撃合同訓練演習。徒歩・騎馬・魔術師・弓・弩・バリスタを組み込んだ護衛隊だけの習熟訓練、キャラバン隊をも組み込んだ攻守の全体訓練。まっ、キャラバン隊の方でも長弓や弩を射れる物も居る様だしな。それと魔術や魔道程使い勝手が良い訳では無いが、魔法師も何人かいる、補助媒体が有ればあれはあれで強力だからな。キャラバンの方も少しは戦えるだろう」。

「う～ん、魔法師って魔法陣を多用するのが魔法師だよね。魔術師は言葉で陣言語を高速詠唱し、足りない所は動作で補う踊り子さん的なのが魔術師だよね。魔道師はイメージをしっかり持って、高速詠唱か無詠唱で大規模殲滅を行使できる人でなしだよね」。

「まあ、・・・なんだな、そちら関係は俺も良くわからん」。

「んー、ね、魔法剣士って言うのは居るの」。

「魔法魔術師に成るには魔力量が少ない、だからと言って魔術魔法師に近い程の魔力量は有る。半端者が辿る職業だな」。

「あう、俺の憧れなんだけど」。

「シュンはあれだ、自分で言っただろう、大規模魔道で殺しまくる人でなしって」。

「自分でいう分にはそれ程とは思わないけど、他人に言われると流石に腹が立つよ。言って置くけど魔法も魔術も使えるからね、ちなみに全種」。

その上、創造・錬金・付与等も出来るとか言ったら別な意味でやばげだ、これは言わない方が良いと判断したが。ある意味それは無駄な事、何故ならシュンは馬鹿だからだが。

「あれだ、大魔道師のシュンが居る限り大安心で有る事は確かだ。まっ、指揮官で有るし、大魔道師と自分でいうからには何かが出て来てもシュンサツダロウナ」。

「なんすかその失敗親父ギャグ、聞いてて死にたくなるし」。

それを聞いたハンクはシオシオと去って行った。

＊＊＊＊

「怪力にして大魔道師なシュン、笑えるし～。それでもって神子由り、ん～もっと何かありそうね。だけどあの容姿は人族にしては反則よね、ハイエルフのあたしもドキってしたもん」。

誰かが独り言を言っている。

旅　　―激闘だ四十五日のキャラバン隊―（後書き）

魔法関係の設定も、俺らしくいいかげんなせっていだっす。集団戦とか個人戦闘も書いてみたいけど、つまずきそう。

小話的閑話　　―国と国との距離は―（前書き）

国と国との繋がりで、なんとか四十七ヶ国有る事が分かった。ただ、大陸数までは確認できなかった。

小話的閑話　　ー国と国との距離はー

「ハンク副長さん、その四十七ヶ国って全部繋がっているのかな。例えば外交官の派遣とか、通商条約みたいな色々な条約を結んでいるとか」。

「其れは無いな、隣の隣の又隣、その隣の隣の又隣。どうでも良くないかそんなの、一生の内で行けそうな国なんて、普通に生きて居れば精々が隣の隣位だろう。最悪奴隷商人に子供時代に捕まって売られたとしても、隣の隣の又隣のその隣位だろうな死ぬまでにだが。国は其々色々な絡みが有るからな、其れでも精々五ヶ国か八か国位だろう。海山大河、砂漠に大森林に荒野、条件付きで有れば空を飛んで行ける国も有るが。其々の場所には行く手を阻む魔獣に魔物、一番始末の悪いのは海の魔物に魔獣だろうな。詳しい事は知らないが、聞いた限りじゃ陸のより何倍もでかいらしいからな、其れでも其処で生きてゆこうと言う人間や亜人や獣人は凄いと思うよ」。

シュンは、傭兵団で奴隷に関しては聞いて居たので驚きも無い。海で生きる人族亜人獣人に、尊敬と畏怖の念を語るハンク。

「奴隷の話は兎も角、其れは一般国民の立場だよね。国同士ではそうは行かないんじゃない、例えば侵略してきそうな国への牽制とか、共同敵対とか物資や資金援助なかとか」。

「まあな、そう言う事はあるが。戦場には血のにおいを嗅ぎ付けて、魔物や魔獣が押し寄せるんだよ。だから、余程の事が無いと国家間が戦争状態にはならないな」。

「その余程の事って何」。

「干ばつによる、極端な国民の飢餓だな。隣国同士、資金や物資の融通援助と助け合うけれど。それだって限度が有る、だから資金の枯渇から食料物資を手に入れられなくなるな。そうなれば国家財政破綻で、食料を買えずに餓死者が増え続ける。そうなったら、国も国民もやけくそになるな。仕掛ける方は飢餓の国、まだ戦える兵士が要る内やっちゃうって言う事だな。どっちにしろ自国の兵と言えど、腹を減らしたオオカミを置いて居る様な物だ。いつ何時己らに牙を剥いて来るか分からん、その前に奪いに行け、あっちには飯が有るぞってな」。

「あ～、眉を顰めようか苦笑でも仕様か、難しい話だね。所で、各王都と王都との距離ってどの位なのかな」。

「んー、このキャラバン隊が行く王都との往復する三ヶ月か四か月半位が片道だな。戦争騒ぎに成りそうになったら、色々な意味でこの位の距離は必要だしな」。

「あー、情報収集とか準備とか国家間の根回しとか」。

「ああそうだ、まったくの奇襲等有り得んからな。常に情報を集めて、出来ればそうなる芽を早期に摘み取るのが賢いやり方だ」。

「ふ～ん、その摘み取ろうその先は、欲惚けそうな王族とか貴族とか、煽って金儲けしようとする大商人とかって言う所だね」。

「ふふっ、それだけじゃあないぞ。立身出世を目指す者にとって平和は敵だ、何とかかき回したい奴は居るものさ」。

「隣の誰かの物を、なんとなく欲しくなったり？」。

「我が儘な奴は何処にでもいる、せめて同じ国内ならって思うが。欲しい物が、その隣の他国に有ったりしたら、だったりしてな」。

＊＊＊＊

「それはそれとして、でっ、俺の最大の謎はあのバリスタなんだけど。親善訪問に見せかけた、隣国の砦攻撃とか王都攻略とかってな話じゃないよね」。

「なっ、そんな訳ないぞってか、出来るか。信じられん、お前は知らんのか、これが有るって言う意味を」。

えっ、慌てて脳内を検索、思い出したふり。

「あ～、忘れてた、これの攻略かぁ～。でも、俺が居るから必要ないんだけどな」。

「なに、必要無いってどういう事だ」。

「まっ、出会ってからのお楽しみって言う事で宜しく」。

小話的閑話　　一国と国との距離は一（後書き）

小話って言う程でも無いし、無駄話って言う閑話でもない・・・半端。

バリスタと獣亀と俺　―その１―（前書き）

ファンタジー世界とは言え、高さ八メートルを超す甲羅の亀が居るのは許せないと思う。しかもワサワサな剛毛が、ぴっちりと生えて居るなんて。

バリスタと獣亀と俺　ーその１ー

十幾つかの村、五つ程の大小さまざまな街を過ぎ。その上道中色々と訓練をしながら、且、魔物や魔獣を退治してと。忙しくしながら、行程の半分は過ぎただろうか。サラッと見れば、地平線しか見えない大草原に今いる。名はポークルーノ大草原と言う、此処にしか居ない生き物にも同名が付けてある。其れはポークルーノと言う巨大獣亀、胎生で甲羅に毛が有る。

「走らせれば普通に早い、馬ほどではないが兎に角早い」と教えて呉れた奴に連呼された、何かトラウマでも有るのだろうか。見ていてシュンは思った、何かに似ているって思ったら、タワシだもんなぁ～と。

「しかしでかいな、実物を見ると本当に亀なのかと疑いたくなるよ」。

ハンクから［要らないと言われるのは解って居るが、話し相手だと思って傍に置いてくれ］そう言って獣族の少年二人と、亜人と言えばいいのか、ハイエルフと角族の少女を一人ずつ今傍らに居る。少年は豹族と虎族だ、少年と言えど獣人族、迫力は半端ない。豹族の少年はロアート、虎族の少年はビグギャルと言う、亜人と獣族には字名は無い。

「シュン、この一頭を倒せば旅の間は肉に困らないぞ、それにうま～なんだぜ」。

「ビグギャル、如何にも食い意地の張ったお前らしい言い方だな」。

「へぇ～、ロアート、だったらお前は何とシュンに言う心算だったんだ」。

「決まって居るだろう、一人で綺麗に倒せたら、十年は遊んで暮らせるぜってよ」。

「ばぁ～か、輸送手段が無かったら、肉や内臓を腐らせて腐臭をまき散らすだけじゃねぇか。しかし、お前って獣族に似使わねぇ奴だな、さっきから何かってぇと金、金ってよ」。

「聞き苦しくも醜い奴と思うだろうが、無ければ飢える、これは俺の人生訓だ」。

「そっかぁ～、辛い事が有ったんだな、もう何にも言わねぇ～し」。

豹族の少年ロアート、先に通った町の露店でお金が足りず。絶品の味のシソーノと言う、地球でいえばナマズの甘辛串焼きを食べ損なった。何故お金が足りなかったかと言えば、仲間通しでの博打で負け込んだからだが。それを知らないビクギャル、変に同情をしてしまった。其れは兎も角として。

「その倒す手段がバリスタって言う事か、なんかボロボロにされて儲かりそうもないんじゃない」。

「否だぞシュン、今回は人外最凶最恐最強魔道師シュンが居るからね」。

そう言ったのは、ハイエルフの超美少女名はスプラ。同じハイエルフの仲間を探す旅をしているというが、実際はどうなんだろうと言う話が有る。本来ハイエルフはエルフの王族、そんな彼らが訳有り

な旅をするのかとの事だ。陰では彼女を、気まぐれなはぐれハイエルフと言う者も居る。

「いやぁ～、スプラ。君にそんな風に言われる筋合いはないと思うけど、スプラッタハイエルフ姫様。ここ最近、お肉が食べられないのは君のせいだと思うのだけど」。

「ほほほっ、華麗に仕留める心算がついねぇ～、シュンに対抗心持つとつい力が入ってぇ～」。

「何その対抗心って・・・・

お～い、シュン、こっちに来てくれ。対ポークルーノ作戦会議を開くぞぉ～。

「ハンクが呼んで居るから行くよ、勝手にポークルーノに手を出すんじゃないよ」。

シュンの声掛けにみんな肩をすくめて、それ程怖い物知らずじゃないと答えた。

バリスタと獣亀と俺　―その２―（前書き）

毛を焼こうと、バリスタに火の魔石を鏃に加工して打ち込んだ傭兵団が居た。という情報を得て、その傭兵団に接触して結果を聞いたら。

バリスタと獣亀と俺　ーその２ー

シュンに「俺が居るのだからバリスタは必要なかったのに」と言われても。バリスタは男のロマン［どこが］、と、ほざいたハンクはしどろもどろ。

「うむ、あれだ・・・全然効果が無かったという話だ。取り敢えず情報を買ったのだがな、あの毛は防炎と言う高機能が有るそうだ。甲羅は堅くと言うか、バリスタでもなかなか甲羅にまで到達しないらしい。毛が邪魔をするそうだ、歩くとシャワシャワと毛がこすれる音がする程硬いらしい」。

らしいらしいのハンクの報告、解ったのは火魔法には魔法耐性有りで。その上硬い毛が邪魔をして、バリスタと言えど甲羅へまでも届かない・・・と、言う情報。

「我々の町には、ポークノールと戦った経験のある傭兵団も冒険者の団も居なかった。故に、今までの通説を信じ此処までバリスタを運んできたが。どうやら無駄だったらしい、なので、是からが奴を倒す為の作戦会議だ」。

「その前にさ、ポークルーノって、基本此方から攻撃をしなければなんと言う事は無いと聞いたけど。其れを無理やり戦いを仕掛ける、無理を承知で倒さなければならない必然性って有るのか？」。

そうシュンが質問すると、何やら慌てた風なおっさんが立ち上がり答え始めた。

「シュン殿、もうお忘れでしょうから改めて申し上げます。私はキ

ャラバン隊と、護衛隊の物資と、資金の運用会計を任せて頂いて居る。ジュパル・ランモ・ハンツと申します。それで、何故ポークルーノをと言うのはハッキリ言ってお金の為です。我が町キャッシュは、子爵閣下も頑張ってはおられますが他の町より若干経済情勢が・・・

「言わば貧乏って事」。

「シュン殿、そうあからさまに言われると」。

「あんたにさ、無駄に長く説明されてもな。俺にバッサリ言われた方が、気持ち的に楽なんじゃね」。

ジュパルは机に突っ伏して震えている、一頭倒せば資金的に楽になる。序でに言えばいい土産に成るのだ、主に隣国の王室へだが。

「先ず言って置く、この狩りは否だ。理由、獣とは云え無駄に命を狩って良い訳が無い。土産だと、ふざけるな。そんな理由で危害を加えても来ないのに、狩りをする必要が何処に有る。無駄に冒険者の団員達を危機に追いやる心算か、もし死んだり一生残る怪我などをされたら。ハンツ殿は責任を取れるのですか、俺にはそんな責任は取れないし背負いたくもない。だいたいなんだ、最初の話と全然内容が違って来ている、俺を馬鹿にしているのか」。

序でにギロリとハンクを睨み、俺にどうにかしてほしい為にガキを隊長にした訳だ。ムカついたので、言った。

「事前に知らせられていなかった、そんな内容も有った事が事実として浮上してきた。名目上とは云え、最高責任者である俺にも確認しなかったという落ち度が有った。なので、バリスタの運搬資金と

人件費は、全額此処に居る俺を含めた幹部全員の給与から天引きする。隊長権限で反論も拒否も抗議も受け付けない、以上だ」。

全員呆気にとられた様で無言だったが、何気に気力と言う物が周りからしぼんでゆく感じがした。自業自得だろう、自分達の懐へも其れなりにと計算して居たのだろうから。

幕舎から出た俺は、腹が減ったので調理班の所へ行く。竜鱗馬のフリーは、ハイエルフのスプラが中心になって世話をしている。何故スプラなのかは、色々あったのだと言う事なのだ。

＊＊＊＊

シュンが食事をしていると、遠くからだが何やら騒々しい声や音がする。誰かが馬鹿をしていないと良いがと思って居ると、軽く地面が揺れる。まさかなとは思ったが、馬鹿は本当に何処にでもいると言う事実。大人の思惑と欲望に充てられたのか誰かさんよってば、頭を抱えるシュンだった。

バリスタと獣亀と俺　　ーその２ー（後書き）

獣亀ポークルーノの弱点は水らしい、大草原の雨季には溺死する奴もいるのだとか。だったらその時来ればいいんじゃねって言ったら、それは国の物で見張りも立つのだと言う・・・国・・・せこくないか？。

大草原の雨季って半端ないな、草原が池や湖って・・・う～ん

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1454x/

シュンの異世界放浪記

2011年10月23日08時14分発行